井伏鱒二著作年表稿（昭和16年～20年）

前　田　貞　昭
岐阜大学教養部文学研究室
（1985年10月14日受理）

A Bibliographical Study of Masuji Ibuse (1941~1945)

Sadaaki MAEDA

は　じ　め　に

戦時下をともに過ごした人々から，井伏鱒二は決して戦争協力の御題目を積極的には唱えなかった，と言われている。そうした井伏評は正確であると思われるし，また，私もそのような立場に立ってきた(注１)。

さて，このような戦争に関わる井伏の姿勢を問題にしようとすれば，ひとまずは，戦時下の井伏の活動そのものを検討することから始めなければなるまい。ところが，戦時下の活動に限らず，井伏の年表類や全集において，信頼の出来る，その活動を網羅しものはないのが実情である。

たとえば，井伏の全集としては，筑摩書房『増補版・井伏鱒二全集』全14巻（昭和49年３月20日～昭和50年７月28日）がある。しかし，それとて著者の意向に従った自選作品集に等しく，その全作品が収められているわけではない。また，本年表稿の提出と前後して刊行が開始された『井伏鱒二自選全集』全12巻予定（新潮社・昭和60年10月10日～）も自選のことばどおり事情は変わらないようだ。他方，ある意味でその欠を補うべき著作年表も各種発表されてはいるが，多くの場合，どの程度まで現物を確認したものか曖昧なため，信頼性に欠ける憾みがあるうえ，全集未収録作品については，それがどのような内容のものであるかも，ほとんど明らかにされていない。

以上のようなことから，本年表稿では，対象期間をほぼ太平洋戦争下（昭和16年１月～昭和20年12月）に絞って，できるだけ現物に当たるように努め，現物に当たることができなかったものについてはその情報の出所を明らかにした。さらに，掲載頁を明示して，およその分量を示すとともに，全集未収録の作品を中心にいくつかの著作については，簡単に内容を紹介することにした。新聞などに関しては不十分な調査しかできていない，私的な心覚えに手を加えたにとどまる本年表稿の公表に疑問を持たないわけではないが，少なくとも，井伏鱒二研究における，前提条件を整える意味くらいは有するであろうと考えた。

なお，当初，初出調査を目的としていたため，単行本・叢書については，調査の行届いていないものもあることを断わっておきたい（凡例参照)。

この報告が，やがて完成するであろう井伏鱒二著作年表の一助となれば幸いである。

注１．「井伏鱒二・その戦時下抵抗のかたち――『花の町』を軸にして――」(『近代文学試論』20号・

昭和58年6月1日。のち，磯貝英夫編『井伏鱒二研究』・溪水社・昭和59年7月10日，学術文献刊行会編『国文学年次別論文集』近代3・朋文出版・昭和60年6月，に再録)。「二つの『多甚古村』——日中全面戦争下の井伏鱒二——」(近代文学試論』22号・昭和59年12月25日)。「『遥拝隊長』の周辺——戦時下の井伏を視座として——」(「岐阜大学国語国文学」17号・昭和60年3月)。

凡　　例

1．本年表稿は，昭和16年から昭和20年までの井伏鱒二の著作（座談会などを含め，井伏鱒二の署名で発表されたもの）を網羅することを目的としたものであり，初出誌紙（もしくは初出単行本・叢書）の発行年月日（奥村などの記載による)(注1）の順に従って，現物未確認のものも含め調査し得た限りのものを掲出した。

2．初出についての各事項は，標題（本文に付されているものによる)，初出誌紙（もしくは初出単行本・叢書）の名称，初出誌紙巻号（初出が単行本・叢書の場合はその発行所)，発行月日（奥付などの記載による)，掲載頁（p.の右に置いた数字によって部分頁を示した。たとえば，p.1～p.3は，起頁が1頁であり，終頁が3頁であることを示している)，書誌的な解題，の順に記した。なお，単行本・叢書などが初出と推定されるものについても，初出の雑誌・新聞と同様にここに掲出しているが，その際，単行本・叢書であることを『　』によって示した。また，筑摩書房増補版全集未収録のものを中心に，＊の後に，分量の少ないものについては全文を掲載し，いくつかのものについては内容紹介と短評を加えた。

3．座談会・詩・翻訳・アンケート回答については，標題のところに＊を付してその旨を記した。

4．本文の標題に付された副題などは，一に括って示した。

5．シリーズ名・欄名・特集名などで，本文・目次などに表示されていても，副題とは見なし難いものは＝に括って示した。

6．編者が補ったことばは＜　＞で括り，標題のないものは＜無題＞として掲出した。

7．（　）は原文にあるものをそのまま生かした。

8．表記は，原則として，新漢字・旧仮名遣いに従った。

9．初収録の単行本・叢書については，解題のところに記し，筑摩書房『増補版・井伏鱒二全集』全14巻所収のものは，大越嘉七編「井伏鱒二作品年譜」(『井伏鱒二の文学』・法政大学出版局・昭和55年9月15日）に倣って，標題の後に，その収録巻数を丸数字によって表示した。たとえば，⑩は，筑摩書房『増補版・井伏鱒二全集』第10巻に収録されていることを示している。また，初収録の単行本・叢書，筑摩書房『井伏鱒二全集』(元版・昭和39年9月25日～40年8月30日，増補版・昭和49年3月20日～50年7月28日）以外の再録については，［　］に入れた番号（注2）によって再録されている単行本・叢書を示した。その際，主として永田龍太郎編『井伏鱒二文学書誌』(永田書房・昭和47年8月20日）によったが，編者の目にとまった範囲でそれを補った。

10．まえがき等で，永田龍太郎編『井伏鱒二文学書誌』(永田書房・昭和47年8月20日）に再録されているものは，標題の後に★を付して示した。

11．初出誌紙などが不明のものも，今後の調査を待つ意味で掲出し，その情報の出所を記した。なお，？によって，当該事項が現物（および写真・複製）未調査のため不明であるか，あるいは二次資料などによって推定したことを示した。

12．何回かにわたって連載されたものについては，その初回のところに，その再録書・解題など全体にわたる事項を記した。

13．対象期間中に刊行された単行本・叢書の初版については，初出単行本・叢書として掲出したものも含め，【　】で示して特立させ，その書誌的事項を記した（注3）。各事項は，単行本・叢書の名称，編者，発行所，初版初刷の発行月日，明記してあるものは発行部数，判型，目次頁数・本文頁数・あとがき頁数など（p. の左に置いた数字によって総頁数を示した。また，本文頁数には中扉も数えた。永田龍太郎編『井伏鱒二文学書誌』・永田書房・昭和47年8月20日，によったものは，そこに掲出されている頁数をそのまま写した），価格，明記してあるものは装丁・挿絵者名，翻訳の場合は原作者と原作名，の順に記し，そして，収録作品名（現物を調査した単行本・叢書については，本文に付されているものによった。そのため，目次を引写したと思われる，『井伏鱒二文学書誌』と相違するところがある）を掲出した。また，合著の場合は各々の作品名・著者名も明示しておいた。なお，その際，現物が調査できずに，『井伏鱒二文学書誌』によったものは，【　】の後に☆を付して示した。また，現物の調査はできなかったが，『井伏鱒二文学書誌』以外のもので補った場合は，◎を付して示した。さらに，単行本・叢書に収録されている作品のうち，初出未詳のため，本年表稿の対象期間中に発表されたとも考えられる作品については，個々の作品名のところに※を付して示した。

14．本年表稿は，前田貞昭・綾目広治・遠藤伸治・藤村猛・丸川浩「井伏鱒二著作年表」（磯貝英夫編『井伏鱒二研究』・溪水社・昭和59年7月10日）の調査をもとに，遺漏・誤謬を補綴し，より詳細な事項を加えて作成した（注4）。前稿作成の際には，『文芸年鑑』，小田切進編『現代日本文芸綜覧』全3巻補巻1（明治文献・昭和43年1月25日～昭和48年8月25日），永田龍太郎編『井伏鱒二文学書誌』（永田書房・昭和47年8月20日），米田清一「解題」（『増補版・井伏鱒二全集』・筑摩書房），大越嘉七編「井伏鱒二作品年譜」（『井伏鱒二の文学』・法政大学出版局・昭和55年9月15日），湧田佑編「書誌及び研究参考文献を配した井伏鱒二年譜」（『私注・井伏鱒二』・明治書院・昭和56年1月25日）を調査の基本とさせていただいた。なお，一々すべてにわたって注記しなかったが，前稿を含めた上記諸年表と本年表稿との異同は，現物調査の結果，本年表稿において補綴したものである。

注1．たとえば，『四季』，『現代文学』の二誌は，奥付記載の発行日付の方が月号より早い（『四季』はほぼ前月25日，『現代文学』は前月末日が発行日付となっている）が，発行年月日に従って配列した。

注2．以下に，その番号，単行本・叢書の標題，発行所，刊行年月日，の順に掲げる。多く，現物調査に至っていないため，不備もあると思われるが，今後の調査を待ちたい。なお，現物未調査のものは，最後に×を付して示した。

1．ドリトル先生アフリカ行	フタバ書院	昭和16年12月15日	
2．雨の歌	飛鳥書店	昭和21年3月20日	
3．ドリトル先生「アフリカ行き」	光文社	昭和21年4月15日	×
4．まげもの　現代文学選20	鎌倉文庫	昭和21年10月15日	
5．風貌姿勢	三島書房	昭和21年12月20日	
6．追剝の話　現代作家選4	昭森社	昭和22年4月15日	×
7．井伏鱒二選集全9巻	筑摩書房	昭和23年3月25日	
		～24年9月30日	×
8．引越やつれ	六興出版部	昭和23年5月5日	×
9．井伏鱒二集	新潮社	昭和25年6月30日	
10．遥拝隊長	改造社	昭和26年4月30日	
11．ドリトル先生アフリカゆき	岩波少年文庫12	昭和26年6月25日	

（昭和53年7月21日，第13刷改版発行。その際，岩波少年文庫1021となる）

12．井伏鱒二作品集全6巻（5巻で中絶）
創元社　昭和28年3月15日
～9月20日　×

13．川端康成・井伏鱒二集　現代日本随筆選1
筑摩書房　昭和28年7月20日　×

14．井伏鱒二集　現代日本文学全集41
筑摩書房　昭和28年12月20日

15．井伏鱒二・太宰治集　昭和文学全集36
角川書店　昭和29年5月15日
（永田龍太郎編『井伏鱒二文学書誌』・永田書房・昭和47年8月20日，には，昭和33年3月25日発行とあるが，現物調査によって訂正した）

16．井伏鱒二・河上徹太郎・中島健蔵集　現代随想全集22
創元社　昭和29年5月20日

17．日本抵抗文学選　三一書房　昭和30年11月30日

18．ジョン万次郎漂流記　他四編　角川文庫　昭和31年2月10日　×

19．井伏鱒二・太宰治名作集　少年少女日本文学選集18
あかね書房　昭和32年9月10日　×

20．井伏鱒二集　日本文学全集32　新潮社　昭和35年5月20日　×

21．ドリトル先生航海記　岩波少年文庫194　昭和35年9月20日
（昭和53年9月21日，第3刷改版発行。その際，岩波少年文庫1022となる）

22．昨日の会　新潮社　昭和36年2月10日

23．厄よけ詩集　国文社　昭和36年3月31日　×

24．ドリトル先生物語全集全12巻　岩波書店　昭和36年9月18日
～37年7月13日

25．少年少女世界文学全集16　アメリカ編6
講談社　昭和37年2月20日

26．井伏鱒二名作集　少年少女現代日本文学全集36
偕成社　昭和39年11月15日

27．井伏鱒二・太宰治・木山捷平　日本短編文学全集36
筑摩書房　昭和43年3月15日　×

28．井伏鱒二集　新潮日本文学17　新潮社　昭和45年1月12日

29．井伏鱒二・太宰治集　あかつき名作館　日本文学シリーズ10
暁教育図書　昭和45年6月15日　×

30．井伏鱒二・上林暁集　現代日本文学大系65
筑摩書房　昭和45年8月5日

31．井伏鱒二集　現代日本の文学21　学習研究社　昭和45年9月1日　×

32．山椒魚・本日休診　講談社文庫　昭和46年7月1日　×

33．戦争文学全集2　毎日新聞社　昭和47年2月28日

34．厄除け詩集　筑摩書房　昭和52年7月21日

注3．『オロシヤ船』（新星社，B6判，目次1p. 本文187p. 定価10円）の奥付には，「昭和18年3月5日印刷発行／昭和21年7月10日再版発行」とあるが，『井伏鱒二文学書誌』p. 127に「初版は昭和十八年三月五日発行となっておりますが事実上発行はしておりません。」とあるので，本年表稿では省略した。

注4．前稿に別添えした「井伏鱒二著作年表補遺」の，昭和18年6月の項に「『陸軍報道班員手記　従軍随想』（講談社　井伏随筆収録）」と掲げたのは編者の誤りであったため，本年表稿では削除した。

付　　記

現物を確認できたものについては解題中に一々触れなかったが，前稿に加えて新たに，鳥越信『日本児童文学史年表２』講座日本児童文学別巻２（明治書院・昭和52年８月25日），福島鑄郎・大久保久雄『大東亜戦争書誌』シリーズ大東亜戦争の記録１（日外アソシエーツ・昭和56年10月９日），同『戦時下の言論』同２（同・昭和57年３月10日），田中宏「『マラヤ軍政』と戦後日本――中島氏の『宣言』と篠崎氏の『回想録』をめぐる考察――」（『紀要《愛知県立大学外国語学部》』14号・昭和56年３月20日），神谷忠孝「南方徴用作家」（『北海道大学人文科学論集』20号・昭和59年２月24日）の調査を利用させていただいた。

多く国立国会図書館蔵の資料に拠ったが，小学館（調査・資料室），家の光協会（調査資料室），大阪国際児童文学館，日本近代文学館の御助力を賜った。それぞれの機関を利用させていただくに当たり，多くの心強い専門職員の方々の御助力を得たが，なかでも小林勝夫氏，河野稔氏には格別の御配慮を載いた。さらに，寺横武夫氏には御助言と鞭撻のことばを頂戴した。

本年表稿の作成に当たって，岐阜大学附属図書館の懇切な利用者サービスの恩恵に浴したことは言うまでもないが，とりわけ，直接御面倒をかけた参考調査係の中齊二三博，松野晃三両氏には惜しみない御援助を戴いた。両氏の御援助がなければ，本年表稿の作成も覚束なかったであろう。

記して，感謝申し上げたい。

今後，機会を与えられれば補綴していきたい。脱漏・誤謬またお気付きの点については，どんな些細なことでも煩を厭われず，〒501-11　岐阜市柳戸１～１　岐阜大学教養部人文系列　前田貞昭まで，お知らせいただければ，まことに幸いである。

なお，原稿提出間際に刊行が開始された『井伏鱒二自選全集』は，残念ながら参看できなかったことを断わっておきたい。

（昭和60年10月14日）

§昭和16年(1941)

1月

小間物屋＝創作＝　③[7]

中央公論　　56年1号　　1月1日　　創作p. 65～74

『おこまさん』(輝文館・昭和16年6月15日)に初収録。

郷土大概記

文学界　　＜再刊＞8巻1号　　1月1日　　p. 108～110

末尾に「(十二月四日)」とある。昭和15年11月(7巻11号)からの続載。7巻11号では「郷土大概記＝故郷の美しさを語る＝」,7巻12号では「郷土大概記(二)＝故郷の風土を語る＝」とある。＊「郷土資料に類する書物」の内から,井伏の郷里に近い神辺の菅茶山にまつわる話を記す。なお,茶山の養子(門田朴斎)の嗣子・門田杉東から,中学時代の井伏が漢学と習字の指導を受けたことも記されている。

増富の谿谷＝読切傑作集・現代小説＝　③

オール読物　　11巻1号　　1月1日　　p. 330～336

挿絵は清水崑。末尾に「(をはり)」とある。『おこまさん』(輝文館・昭和16年6月15日)に初収録。

青苔の庭(第一回)＝新連載長編小説＝

新女苑　　5巻1号　　1月1日　　p. 100～107

挿絵は北川実。末尾に「(つゞく)」とある。昭和16年12月まで連載。＊老漢学者菱田荇菜は老齢を理由に,さる私立大学を退職した。退職を機会に転居したものの,在職当時から荇菜宅に設けられていた漢学塾は続けられている。荇菜宅の書生・矢野は法科の学生であるが,塾の講義にも出席している。矢野は,相前後して,三人の塾生から,それぞれ恋の仲立ちを依頼される。このことを知った荇菜は「風紀紊乱」と見て塾を閉鎖する。「青苔の庭」という題名は,荇菜思いの矢野が,新居に,青々とした苔を生やそうと試みるところから取られている。矢野に恋の仲立ちを依頼する若者風俗と,老漢学者荇菜とを対比的に描いたとも解釈できなくもないが,結末を急いだ感があり,やや焦点の絞り切れていないような印象を受ける作品である。

ドリトル先生船の旅＝名作物語＝　＊翻訳[21.24.25]

少年倶楽部　　28巻1号　　1月1日　　p. 17～26

原作,Hugh John Lofting, *The Voyages of Doctor Dolittle*。挿絵は河目悌二。末尾に「(つゞく)」とある。昭和17年12月まで連載。しかしながら,『ドリトル先生アフリカゆき』(岩波少年文庫・昭和26年6月25日,第13刷改版・昭和53年7月12日,第21刷・昭和59年10月20日)の「あとがき」には「某出版社の児童読物雑誌が第二巻の『ドリトル先生航海記』を私の翻訳で連載することにしました。ところが連載二回目か三回目くらいまで私が訳したとき大東亜戦争(太平洋戦争)が始まって,私は陸軍徴用でマレー半島の戦地へ連れられて行き,出版社の方でも軍部へ遠慮してこの原稿は立ち消えにさせました。」とある。他方,この『少年倶楽部』の連載に関しては,「大きく組みましてね。原稿は毎月三十枚ぐらい。連載が三分の二ぐらいすんだとき,私は徴用で外地に行くのです。一回ぶんずつ訳していましたから,急なことで間にあわないので,後は私の知っている人が二人で訳しまして,それを東京日日新聞の高田君という記者が,仮にぼくの文章ということにして直した

のです。それで雑誌に続けて出した。だから後の三分の一は代作ですが，戦後，岩波書店で全集を出すというので，全部やり直したのです。誤訳なんか小沼君に見てもらいまして。／（略）第二巻を訳すとき講談社が原書を五，六巻までぼくに渡していたのですが，戦後いらないからやろうといって，ぼくにくれました。それを疎開先へ持って行き，三年五ヵ月疎開している間に，三巻，四巻を訳したのです。なにもすることないですからね。それを偶然，石井桃子さんの編集で岩波から出すことになったのです。あとは代訳です。」という井伏の発言がある（「昭和十年代を聞く　第二回　井代鱒二氏」，第二次『季刊文学的立場』第２号・昭和45年９月10日。のち，「徴用作家として　井伏鱒二氏」と改題して『文学・昭和十年代を聞く』・勁草書房・昭和51年10月７日，に再録。引用は単行本による）。一応，井伏鱒二の署名のもとに発表されているので，以下，最終回まで掲出しておく。『ドリトル先生航海記』講談社版世界名作全集24（講談社・昭和27年２月10日）に初収録。この際，相当部分にわたって，表現の改変や，誌面の都合からか初出誌では削除されていた部分の補入が行なわれている。「記者のいろいろ」（筑摩書房『増補版・井伏鱒二全集』第11巻所収）中の「戦争が満洲から大陸全体に広がつて行きさうになつたころ，私は某社の少年雑誌の注文で翻訳童話の連載を始めることになつた。」云々と語られているのは，本連載を指しているであろう。この「記者のいろいろ」に，本文削除をめぐって不愉快な思いをしたことが書かれているので，誌面の都合による制約があったと思われる。

ドリトル先生のこと

少年倶楽部　　28巻１号　　１月１日　　p. 18

「ドリトル先生船の旅」連載にあたってのことば。井伏の写真一葉を付す。＊「私は子供のときから，たくさんの童話を読んでもらつたり，また自分でも読んだりしましたが，童話の国のドリトル先生といふ人くらゐ，心のやさしい人は，ないのではないかと思ひます。／ドリトル先生は，気の毒な人や，弱い人に親切にするばかりでなく，獣や小鳥にまで親切にします。おまけにこの先生は，獣や小鳥と，話をすることができるのです。まるでほんとでない話のやうですが，大きな深い愛――やさしい心といふものは，きつとふしぎを生むのだらうと思ひます。私はドリトル先生の神に近いそのやさしい心に感心しましたので，ドリトル先生の『船の旅』といふお話を，日本文に書きなほしました。／このお話『船の旅』は，ドリトル先生に可愛がられたトミーといふ子供が書いたことになつてゐます。トミーは，作文を書くやうに，このお話のなかで自分のことを『私』といつてゐます。この子供はドリトル先生と同じやうに，童話の国の人で，パドルビーといふ町の靴屋の子供でした。／それはずゐぶんむかしむかしの――といつても，実はそれを正しくいへば，私たちのおぢいさんが，子供であつたころの話です。ですから，そのつもりでよんで下さい。」以上全文。

自序

『さざなみ軍記（附　ジョン万次郎漂流記）』

河出書房　　1月20日　　前付p. 1

＊「『さざなみ軍記』はその発端を十年前に発表し，その後三年置きくらゐにすこしづつ発表した。但し，これは終始架空の物語である。私は学生時代に，不図したことから五箇庄の民家で保存してゐた古い日記を見た。それは平家某が都を落ちて行

く路すがら，ときどき思ひ出したやうに書き記した家計簿であつた。甚だ簡単な家計簿だが，買ひ入れる食糧や品物が，日を追うて貧弱な安値なものになつて行くのが歴然とわかつた。私はこの転変に明暗二相の対照を覚え，色彩的な興趣さへも感じたのであつた。後日，私はそれに暗示を得てこの物語にとりかかつた。今回，私はこの物語の発端の文章を読みなほし，ひそかに改訂を加へたい気持である。しかし平家某の少年の転変して行く姿を現す意図のもとに，あへて改訂を加へないことにした。／『ジョン万次郎漂流記』は河出書房の注文により，いはゆる記録的読物として史実本位に書いた。しかしこの読物と『さざなみ軍記』を合本にしたわけは，専ら河出書房の企画上の都合によるものである。」以上全文。

【さざなみ軍記（附　ジョン万次郎漂流記）】

河出書房　　1月20日　　B 6判　　自序1p.　目次1p.　本文268p.　　定価1円80銭

＜収録作品＞

さざなみ軍記　　p. 1～155　　ジョン万次郎漂流記　　p. 157～268

ドリトル先生「アフリカ行き」　＊翻訳［1.3.11.24］

『ドリトル先生「アフリカ行き」』

白林少年館出版部　　1月24日　　p. 1～217

原作，Hugh John Lofting，*The Story of Doctor Dolittle*。戦後の『ドリトル先生アフリカゆき』（岩波少年文庫，第1刷・昭和26年6月25日，第13刷改版・昭和53年7月12日，第21刷・昭和59年10月20日）の「あとがき」には次のような一節がある。「私が『ドリトル先生物語』を知ったのは，昭和十五年の春，児童文学作家の石井桃子さんに一読を勧められてからでした。その頃は，もう中国大陸での戦争が苛烈になって出版にも統制令が実施され，子供の読物なども国粋調になって行く一方でした。石井さんは大変それを苦に病んで，本当に子供のためになる児童読物を出す出版社を御自分でつくる計画をたてました。設立資金は御自分が文芸春秋を止した退職金か何かで間にあわせたようでした。そして御自分で，粒選りにした作品の『ドリトル先生アフリカゆき』を最初に出すことにして，翻訳の仕事は私に片棒を担がせました。つまり石井さんが下訳をして，私に仕上げの仕事を云いつけたのでした。／石井さんの出版社は白林少年館と名づけられ，昭和十六年に発足しましたが，『ドリトル先生アフリカ行き』が出たきりで（たぶん，これ一冊きりだったと思いますが）社がつぶれてしまいました。呆気ないことでした。」また，「童話『ドリトル先生』物語」（『文学界』・＜再刊＞7巻10号・昭和15年10月1日）には，「第一章　パドルビー」の試訳を載せている。そこに，井伏は，「〈ロフティングは〉招集されて欧州大陸へ出征し，自分の子供から何か面白いことを書いてくれとせがまれてこの童話を書いた。（略）しかし戦地のニュースといふものは，おそろしいことか或ひは退屈な話にきまつてゐる。検閲も考慮しなくてはならないのである。／（略）……実戦の塹壕のなかで吾が児を楽しませるために書いた童話といふ意味で私は興味を覚えるのである。もし私が今度の戦争に従軍してゐたら，しかし私は吾が児を喜ばせる童話と自筆の挿絵を吾が家に送るかどうか疑問である。」と記している。井伏の従軍中の態度を考える上で示唆を与える一節であろう。

あとがき

『ドリトル先生「アフリカ行き」』

白林少年館出版部　1月24日　p. 218～221

Hugh John Lofting, *The Story of Doctor Dolittle* の翻訳に付された「あとがき」。『ドリトル先生「アフリカ行き」』（光文社・昭和21年4月15日）の「あとがき」（永田龍太郎編『井伏鱒二文学書誌』・永田書房・昭和47年8月20日，所収）は，本「あとがき」に，わずかな字句の修正を加え，光文社版発行の事情を記した最終段落を付したものである。

【ドリトル先生「アフリカ行き」】＊翻訳

白林少年館出版部　1月24日　B 6判　目次2p. 本文217p. あとがき4p.
定価1円50銭　装丁・挿絵・村上巌　原作・Hugh John Lofting, *The Story of Doctor Dolittle*

＜収録作品＞

ドリトル先生「アフリカ行き」p. 1～217

2月

黒い表紙の日記帳＝小説＝

改造　23巻3号　2月1日　創作p. 48～55

末尾に「（或る長篇の一節）」とある。＊さる高名な日本のジャーナリストの手帳が，ソ満国境近くでソ連官憲の手に没収された。モスクワ在住の亡命日本人杣戸正吉は，ゲ・ペ・ウ本部に呼び出され，その手帳の翻訳を命じられる。杣戸はそのなかに，地下運動時代の同志の名を発見する。井伏にしてはアクチュアルな題材が扱われる，異色の作品と思われるが，残念ながら，作品はこれだけで中断されたようである。

青苔の庭（第二回）＝長編小説＝

新女苑　5巻2号　2月1日　p. 180～188

末尾に「（つゞく）」とある。

ドリトル先生船の旅＝名作物語＝　＊翻訳

少年倶楽部　28巻2号　2月1日　p. 49～59

末尾に「（つゞく）」とある。

多々良紀行

博浪沙　6巻2号　2月5日　p. 16～17

＊「薬屋の店さきで薬をつけ，帰りに古本屋に寄つて古雑誌など見てゐると，ふと一つの雑誌に館山附近のことを書いた一文の載つてゐるのが目についた。中央学術雑誌第五号（明治二十五年九月十五日出版）といふ薄い雑誌である。『房州多々良紀行』といふ題で，筆者は霞峰仙史となつてある。」として，以下，「雑録」欄に掲載されているその「房州多々良紀行」の内容が紹介してある（目次には「房州多々羅紀行」となっている。「雑録」欄中p. 46～50に掲載）。興味深いのは，その内容もさることながら，実は，「中央学術雑誌第五号（明治二十五年九月十五日出版）」の「文苑」欄には，井伏鱒二の父・井伏素老の漢詩「次某君見寄韻」（寺横武夫「井伏素老の漢詩文」，『国文学　解釈と鑑賞』50巻4号・昭和60年4月1日，参照）が掲載されていることである。同じ「文苑」欄に載せられている漢詩について，「明治二十五年といへば五十年の昔である。亭主もおかみさんも最早や多界（ママ）してゐるだらう。霞峰仙史といふ人はまだ健在であらうか。同じその雑誌に，たぶん同じ人と思はれる根本霞峯といふ筆名で詩が載つてゐる。寧斎に贈る漢詩である。この詩の欄には冒頭に森槐南の詩を載せ，その次に野口寧斎の詩を載せてある。それ等の詩は私には大体の意味しかわからない。」としか書いていないが，これだけ手に取っていて，同じ「文

苑」欄の末尾にある父・井伏素老の漢詩に気付かないはずはないだろう。「霞峰仙史といふ人はまだ健在であらうか。」などという個所に，幼くして父をなくした井伏の思いを見るのは穿ちすぎだろうか。「略歴」(『井伏鱒二集』新日本文学全集第10巻・改造社・昭和17年9月1日）に，「私の六つのときに父は亡くなつたが，私たち兄弟に決して文学をさしてはいけないと言ひおいて亡くなつたさうである。これは父が文学者にならうとして失敗したからであらう。私の田舎の生家には，いまも父の書いたまづい文章がのこつてゐる。」と井伏は記している。にもかかわらず，その父の漢詩については，井伏は文中に一切触れてはいない。「薬屋の店さきで薬をつけ，帰りに古本屋に寄つて古雑誌など見てゐると，ふと一つの雑誌に館山付近のことを書いた一文の載つてゐるのが目についた。」というのも，ずいぶん怪しい。井伏流の照れであろうか。(井伏素老の漢詩に関しては，寺横武夫氏に示唆を得た。)

＜無題＞＝雑信一束＝

四季　　55号　昭和16年3月号　　2月25日　　p. 57

＊「きのふの夜，帰るとき，阿佐ヶ谷から荻窪まで，省線電車にたつたひとり，乗客は僕ひとりだけで，まことに勿体ない気がした。反つて満員の方が，気がらくだ。——以上を詩に書きたいと思つたが，考へてゐるうちに荻窪に着いた。駅を出ると寒い風が風速十三米ぐらゐ。」以上全文。

3月

青苔の庭（三）＝連載長篇小説＝

新女苑　　5巻3号　　3月1日　　p. 214～224

末尾に「(つゞく)」とある。

ドリトル先生船の旅＝名作物語＝　＊翻訳

少年倶楽部　　28巻3号　　3月1日　　p. 41～51

末尾に「(つゞく)」とある。

追悼記

博浪沙　　6巻3号　田中貢太郎追悼号　3月5日　　p. 40

＊「先生に捧げる詩か俳句をつくらうと何かにつけ工夫をこらしたが，いまだに出来ないのである。」という一節にある井伏の気持を，葬儀参列前後のいくつかの些事に託した，田中貢太郎追悼文。

跋　★

『シグレ島叙景』

実業之日本社　　3月12日　　p. 300～301

目次には「あとがき」とある。

【シグレ島叙景】

実業之日本社　　3月12日　　B 6判　　目次3p.　本文295p.　跋＜目次には「あとがき」とある＞2p.　　定価1円50銭　　装丁・福田豊四郎

＜収録作品＞

炭鉱地帯病院——その訪問記——	p. 5～19	使徒アンデレの手紙	p. 157～169
		先生の広告隊	p. 171～180
山椒魚	p. 21～33	ジョセフと女子大学生	p. 181～201
女人来訪	p. 35～64	シグレ島叙景	p. 203～231
休憩時間	p. 65～77	夜ふけと梅の花	p. 233～254

朽助のゐる谷間	p. 79～124	円心の行状	p. 255～266
遅い訪問	p. 125～143	ユキコ	p. 267～282
寒山拾得	p. 145～156	寒夜　※	p. 283～299

【四季詩集】

丸山薫編　山雅房　3月20日　800部限定　A 5判　目次 4 p.　本文321p.　後記 2 p.　定価 3 円50銭　装画・立原道造

井伏鱒二，乾直恵，内木豊子，大木実，木村宙平，坂本越郎，神保光太郎，杉山平一，竹村俊郎，竹中郁，田中冬二，立原道造，高森文夫，津村信夫，塚山勇三，萩原朔太郎，福原清，丸山薫，真壁仁，槙田帆呂路郎，三好達治，室生犀星，村中測太郎，薬師寺衛，以上24名（五十音順）の詩数編ずつを収める。なお，井伏の作品は，「歳末閑居」(p. 8～9)，「石地蔵」(p. 10～11)，「逸題」(p. 12～13)，「つくだにの小魚」(p. 14～15，小見出には「つくだ煮の小魚」とある)，「冬の池畔――甲州大正池――」(p. 16～17)，「按摩をとる」(p. 18～19) 以上 6 編で本書初出のものはない。

丸山薫の「後記」に，「編輯を委せられたとき，僕は『四季』の同人でふだん詩を書かないでゐる人たち，所謂，狭い意味での詩人でない人たちから作品を頂かうかとも思つた。けれど一方，熱心に詩を書いてゐる後進の人々のことも念頭に来た。収容人員が多くも二十名までといふ書肆の方からの話だつたので，思ひ切つて後者を選んだ。」と編集方針を記した一節がある。

あとがき　★

『夏の狐』井伏鱒二随筆全集第 1 巻

春陽堂書店　3月23日　p. 285～286

【夏の狐（井伏鱒二随筆全集第 1 巻）】

春陽堂書店　3月23日　B 6判　目次 3 p.　本文284p.　あとがき 2 p.

定価 2 円　装丁・野間仁根

＜収録作品＞

牛込鶴巻町	p. 1～ 22	梅雨空	p. 152～158
樹木	p. 23～ 31	無人島長平	p. 159～168
葉煙草	p. 32～ 37	長平の墓	p. 169～176
上京直後	p. 38～ 41	アラヤ殿下のこと	p. 177～192
七月一日拝見	p. 42～ 49	山小屋の番人	p. 193～199
芹摘み	p. 50～ 52	旅さきの食べもの	p. 200～208
霞亭の観梅詩	p. 53～ 61	猟見物	p. 209～217
光琳の人物画	p. 62～ 66	池	p. 218～226
釣鐘の音	p. 67～ 77	二月九日所感	p. 227～232
旅中友人の災難	p. 78～ 87	父親としての気持	p. 233～244
軍鶏	p. 88～ 97	壺	p. 245～251
新作の伝説	p. 98～104	鯨	p. 252～260
書画骨董の災難	p. 105～109	新緑	p. 261～276
夏の狐	p. 110～113	鼾について	p. 267～270
荒廃の風景	p. 114～123	青い鳥	p. 271～275
鞆ノ津所見	p. 124～129	ロシヤ屋の女給	p. 276～278
田園記	p. 130～141	地獄絵	p. 279～284

静夜思　　p. 142～151

＜無題＞＝雑信一束＝

四季　　56号　昭和16年４月号　　３月25日　　p. 63

＊「胃が痛いので閉口です。何とかして徹底的になほしたい。腸の痛いのとちがつて不安なやうな気持をともなひ，それに重つ苦しい感じの痛みです。煙草が一ばんよくないやうに思ひます。」以上全文。

４月

五三郎君に関する記　⑨[５．７．13]

文学界　　＜再刊＞８巻４号　　４月１日　　p. 86～96

『風貌姿勢』井伏鱒二随筆全集第３巻（春陽堂書店・昭和17年２月18日）に初収録。

モデル供養　[５．７．13]

公論　　３巻４号　　４月１日　　p. 305～310

末尾に「(三月十日)」とある。『風貌姿勢』井伏鱒二随筆全集第３巻（春陽堂書店・昭和17年２月18日）に初収録。＊井伏は田中貢太郎の危篤・死去の電報に接して，慌しく高知に駆けつけ，葬儀に列席する。その慌しさの表現に田中貢太郎を失った井伏の悲しみの気分がよく現われている。「モデル供養」の題名は，ある時，田中貢太郎が，小説のなかの人間たちにつらい思いをさせているわれわれは，小説のモデルを供養する必要があると洩らし，その会の幹事を井伏に依頼したことによっている（どうも，酒を飲む口実の一つだったようでもあるが)。

青苔の庭＝長篇連載小説＝

新女苑　　５巻４号　　４月１日　　p. 156～163

連載第４回。末尾に「(つゞく)」とある。

ドリトル先生船の旅＝名作物語＝　＊翻訳

少年倶楽部　　28巻４巻　　４月１日　　p. 49～59

末尾に「(つゞく)」とある。

風貌姿勢 ― 小田嶽夫 ―[５]

四季　　57号　同人特集号　昭和16年５月号

４月25日　　p. 30～31

『風貌姿勢』井伏鱒二随筆全集第３巻（春陽堂書店・昭和17年２月18日）に初収録(「風貌姿勢」の内)。＊「魯迅伝」取材のエピソードを通じて小田嶽夫の一面を描き出したもの。

５月

青苔の庭（第五回）＝長篇連載小説＝

新女苑　　５巻５号　　５月１日　　p. 206～213

末尾に「(つゞく)」とある。

ドリトル先生船の旅＝名作物語＝　＊翻訳

少年倶楽部　　28巻５号　　５月１日　　p. 49～59

末尾に「(つゞく)」とある。

＜無題＞＝博浪沙通信＝

博浪沙　　６巻５号　　５月５日　　p. 22

冒頭に「(四月二十三日)」とあり，末尾に「(山の宿にて)」とある。＊「すこし早す

ぎました。まだ冬木立です。タラの芽もウドもみんな後一ケ月たたなくては駄目です。山麓近くには野桜が咲いてゐましたが，バスでわづか三十分の道程で山上はこんなにも違ひます。二三日前，山登りの六人連れが来て山路を迷ひ寒さと空腹のため一人が死にました。もう十分間も我慢してゐたら助かつたのですがどうも気の毒なことになりました。今年は小鳥が非常に多く各種こゝに集まつてゐます。」以上全文。

6月

五月五日の日記

文学界　＜再刊＞8巻6号　6月1日　p. 106～109

＊前半には「伊東満所のことを書く計画」について述べ，後半には，日頃なかなか原稿を書き始めるに至らず，前日もそうであったことを記している。その執筆計画の容易に進捗しそうにないことを暗示するか。

青苔の庭（第六回）＝長篇連載小説＝

新女苑　5巻6号　6月1日　p. 144～152

末尾に「（つゞく）」とある。

ドリトル先生船の旅＝名作物語＝　＊翻訳

少年倶楽部　28巻6号　6月1日　p. 25～35

末尾に「（つゞく）」とある。

【おこまさん】◎

輝文館　6月15日　B 6判　目次1p.　本文305p.　定価1円50銭　装丁・挿絵・岸丈夫

＜収録作品＞

おこまさん	p. 1～ 86	増富の渓谷	p. 233～245
四つの湯槽	p. 87～158	孫　※	p. 247～261
信濃守　※	p. 159～196	争ひの行方　※	p. 263～284
素情吟味	p. 197～231	小間物屋	p. 285～305

以上は，昭和16年8月25日の再版による。永田龍太郎編『井伏鱒二文学書誌』（永田書房・昭和47年8月20日）においては，頁数が285頁になっている。同書の頁数は，何を指すか明記されていないが，各書の最終頁を写したもののようである。「初版」未確認のため断定できないが，再版での改編とは考えにくい。あるいは，何か事情があるのだろうか。

7月

青苔の庭（第七回）＝長篇連載小説＝

新女苑　5巻7号　7月1日　p. 112～123

末尾に「（つづく）」とある。

ドリトル先生船の旅＝名作物語＝　＊翻訳

少年倶楽部　28巻7号　7月1日　p. 25～35

末尾に「（つゞく）」とある。

8月

対談会の記

文学界　＜再刊＞8巻8号　8月1日　p. 100～104

＊「文学界」掲載のために三好達治と対談会を行なったが，失敗に終わる。しかし，

せっかく「いろんな人の労力」がかけられたのだから,「せめて一部分だけでも記録してみたい」として，その一部を載せる。

釣と政事と狐＝書翰往復＝

文学界　　＜再刊＞8巻8号　　8月1日　　p.142～146

林房雄との往復書簡。井伏書簡6通（11月6日付，11月9日付，11月22日付，4月22日付，5月11日付，日付不載分),林書簡3通（11月8日付，4月20日付，5月6日付）および林の「追記」がある。

青苔の庭（第八回）＝長篇連載小説＝

新女苑　　5巻8号　　8月1日　　p.94～101

末尾に「(つづく)」とある。

ドリトル先生船の旅．＊翻訳

少年倶楽部　　28巻8号　　8月1日　　p.33～43

末尾に「(つゞく)」とある。

9月

隠岐別府村の守吉＝読切傑作集・時代小説＝　③[4.7.9.12.14.18.28]

オール読物　　11巻9号　　9月1日　　p.206～213

挿絵は鈴木信太郎。末尾に「(をはり)」とある。『御神火』(甲鳥書林・昭和19年3月30日）に初収録。

青苔の庭（第九回）＝長篇小説＝

新女苑　　5巻9号　　9月1日　　p.86～93

末尾に「(つづく)」とある。

ドリトル先生船の旅＝名作物語＝　＊翻訳

少年倶楽部　　28巻9号　　9月1日　　p.25～36

末尾に「(つゞく)」とある。

10月

西金の渡船番＝小説＝

改造　　23巻19号　　10月1日　　創作p.1～11

＊私が佐藤垢石らと鮎釣に行った奥久慈の西金村には，渡し番の老人がいた。耳が遠く，藁小屋のようなみすぼらしい小屋に住む，その老人の「惨めさはあまりにも念入りに出来て」いた。渡し船を利用する少年たちのエピソードを交えて，私は，老人の心事に思いを致す，といった作品である。旅先の見聞を記す「葉煙草」や「へんろう宿」ふうの作品であるが，それらより老人への感情移入が表に出ているように思われる。

青苔の庭（第十回）＝長篇小説＝

新女苑　　5巻10号　　10月1日　　p.180～185

末尾に「(つづく)」とある。

ドリトル先生船の旅＝名作物語＝　＊翻訳

少年倶楽部　　28巻10号　　10月1日　　p.25～36

末尾に「(つゞく)」とある。

あとがき　★

『山の宿』井伏鱒二随筆全集第2巻

春陽堂書店　　10月20日　　p.253～254

【山の宿（井伏鱒二随筆全集第２巻】　◎

春陽堂書店　10月20日　Ｂ６判　目次３p.　本文252p.　あとがき２p.

定価２円　装丁・野間仁根

＜収録作品＞

釣魚記	p. 1～ 12	室戸岬	p. 128～132
山の宿	p. 13～ 18	高千穂	p. 133～140
千谷の牛市	p. 19～ 24	都井崎の野馬	p. 141～145
京都	p. 25～ 29	日向青島	p. 146～152
金山踊	p. 30～ 35	奥利根の藤原村	p. 153～167
餞別	p. 36～ 39	大正池	p. 168～179
東京のお獅子　※	p. 40～ 47	土佐バス	p. 180～182
初夏巡遊案内	p. 48～ 54	九月十三日	p. 183～187
八束・斐の川	p. 55～ 62	恵林寺	p. 188～191
下田行き	p. 63～ 77	御坂上	p. 192～100
蝗	p. 78～ 82	山上通信――永井龍男に宛てた通信――	
夏日お山講	p. 83～ 88		p. 201～208
フジンタの滝	p. 89～ 91	旅行その他（鶏肋集より）	p. 209～221
甲州の話	p. 92～104	車中見聞	p. 222～229
蛍合戦	p. 105～110	三宅島噴火の当日	p. 230～237
山籠り	p. 111～114	高千穂	p. 238～246
七面山所見	p. 115～122	増富温泉場	p. 247～252
土佐	p. 123～127		

11月

葡萄の村＝グラビヤ＝

新女苑　５巻11号　11月１日　グラビヤp. ５～12

文・井伏鱒二，撮影・三宅定雄。＊写真18葉と井伏文とで構成。具体的な地名はわからないが，文中に引合いに出された芭蕉の句から，甲州勝沼付近と推定される。生産に励む農村の現地取材といったところであるが，椋鳥が葡萄畑を襲う様子や，「葡萄の葉がみんな散り尽してしまふ」霜の降りる夜の想像など，いかにも井伏らしい詩情が見受けられる。

青苔の庭（第十一回）＝長篇小説＝

新女苑　５巻11号　11月１日　p. 100～105

末尾に「（未完）」とある。

ドリトル先生船の旅＝名作物語＝　＊翻訳

少年倶楽部　28巻11号　11月１日　p. 25～36

末尾に「（つゞく）」とある。

上田秋成のつゞけ字（上）

東京日日新聞　朝刊　11月５日　３面

国立国会図書館蔵による。翌日に続載。『大阪毎日新聞』（名古屋市鶴舞中央図書館蔵）には不載。なお，『東京日日新聞』10月31日付朝刊（国立国会図書館蔵）第２面に「埋れてた秋成の稿本」（副見出「『江のかすみ』や愛用の茶碗数々／井伏，小田両氏が確認」），『大阪毎日新聞』10月29日付夕刊＜発行は10月28日＞（名古屋市鶴舞

中央図書館蔵）第2面に「世に出る続雨月物語」(副見出「垂涎の『日記』『江のかすみ』など……／上田秋成の遺稿発見」)という記事がある。各々，副見出やリードに井伏たちがこれらを確認したとあり，発見の経緯とその内容が簡単に報じられた後，笹川臨風・佐藤春夫の短いコメントが付されている。井伏が「秋成」(筑摩書房『増補版・井伏鱒二全集』第10巻所収，「骨董」の内）で，「酒田市の山椒小路の三郎さんといふ人は書画が好きで，なかんづく上田秋成の断簡寸墨をたくさん持つてゐる。（略）私は小田嶽夫君を誘つて酒田に行つた。――戦争のはじまる前の年の十一月であつた。／（略）ところが東京に帰つて来た翌日，某新聞社の社会部の年若い記者が家へ来てかう云つた。／（略）とても新聞記者ではないだらうと思つたが，翌日の新聞を見ると大きな見出しで書いてあつた。サブタイトルに，私が『秋成の真蹟と鑑定す』と云つたやうな工合に書いてあつた。途端に私は顔が赤くなるのを覚え，今後はもう迂闊に新聞記者にはロがきけないと自戒した。」と書いているのは，この記事のことであろう。(この「秋成」に「戦争のはじまる前の年の十一月であつた」とあるのは井伏の記憶違いであろう。「『雨月物語』明治翻刻本――佐藤古夢のこと――」筑摩書房『増補版・井伏鱒二全集』第14巻所収，には，この酒田訪問は昭和16年のこととして述べられているし，引用した新聞記事に拠れば同年10月としなければならない。）＊上記記事の当事者である井伏自身が，酒田で実見した秋成の遺稿・遺品について記したもの。

上田秋成のつゞけ字（下）

東京日日新聞　朝刊　　11月6日　　2面

国立国会図書館蔵による。『大阪毎日新聞』（名古屋市鶴舞中央図書館蔵）には不載。

＜無題＞＝本年度の文学作品で好かれ悪かれ貴下の関心を惹いたものは何か？（アンケート）／一，著者と題名／二，その理由（到着順）＝　＊アンケート回答

現代文学　　4巻10号　12月号　　11月30日　　p. 59～69，井伏分p. 69

＊「昨夜九州から帰来，貴翰拝見いたしました。別の随筆か何かお送りします，両三日中に送ります　敬具。」以上全文。

12月

青苔の庭（第十二回）＝長篇小説＝

新女苑　　5巻12号　　12月1日　　p. 86～91

末尾に「(完)」とある。

ドリトル先生船の旅＝名作童話＝　＊翻訳

少年倶楽部　　28巻12号　　12月1日　　p. 25～36

末尾に「(つゞく)」とある。

序

『光を求めて』　清水書房　　12月5日　　前付p. 1～3

金谷完治著短編小説集『光を求めて』(装丁・鈴木信太郎，定価1円80銭，B6判，序3p. 目次2p. 本文300p. 後記2p.）の序文。＊「怒つて当然なときには怒らないで，怒らなくてもよささうなときにいきなり怒りだすことがある」という金谷のエピソードを記す。「序」というより，あの「風貌・姿勢」に収められるのが相応しいような一文である。

倉島君の病気？

南航ニュース？　3号？　　12月5日？　1面？

「南航大概記」(筑摩書房『増補版・井伏鱒二全集』第10巻所収）による。全集p. 16～17に掲載。「私の万年筆」(筑摩書房『増補版・井伏鱒二全集』第10巻所収）に「私たちの班には，新聞記者が十人ばかりゐた。その人たちはガリ版印刷で半紙一枚大の日刊新聞を発行した。紙名を『南航ニュース』と云つたが，ニュースはあまり載らないで詩や童話や雑文感想のやうなものが主に載つてゐた。」とある。

＜無題・開戦の感想＞　＊アンケート回答

南航ニュース　7号　12月9日　1面

『高見順日記』第1巻（勁草書房・昭和40年9月20日）p. 257, 寺崎浩『戦争の横顔——陸軍報道班員記』シリーズ戦争の証言15（太平出版社・昭和49年8月15日）p. 6に写真版で掲載。「本暁（八日）六時遂に日英米は戦闘状態に入つた。これに対して各人各様の感想を持たれたことと思ひここに集めて特輯した。」という，特集全体に対する前書がある。＊「かうなるやうになつたと思ふ。もう少し早く発てばよかつた。風邪をひいて頭が重いせゐかショックといふやうなものは余り感じなかつた。」以上全文。「十二月八日記」(筑摩書房『増補版・井伏鱒二全集』第11巻所収，「折々艸紙」の内）に「当日は，船中新聞の編輯者が，僕たちに開戦に関する感想文を書かせた。その新聞は徴用員が発行するのだが，輪送指揮官の検閲がやかましい。厳しい鉄則があつた。僕は規則を破るわけにも行かないので『風邪発熱につき，呆然としてゐた』といふやうな意味のことだけ書いて出した。これなら嘘でもなく，軍の鉄則に対して当りさはりも無く，目につかないですむ。」とある。

あとがき

『ドリトル先生アフリカ行』

フタバ書院　12月15日　p. 209～212

『ドリトル先生「アフリカ行き」』（白林少年館出版部・昭和16年1月24日）の「あとがき」とほぼ同じ。

【ドリトル先生アフリカ行】　＊翻訳

フタバ書院　12月15日　A5判　目次4p.　本文208p.　あとがき4p.　定価1円50銭　装丁・挿絵・黒崎義介　原作・John Hugh Lofting, *The Story of Doctor Dolittle*

＜収録作品＞

ドリトル先生アフリカ行　p. 1～208

＊三宅島噴火の当日　⑨[7.16]

初出不明

本文中に「昨年七月十二日，三宅島爆発の日」とあるので，昭和16年の執筆と推定される。『山の宿』井伏鱒二随筆全集第2巻（春陽堂書店・昭和16年10月20日）に初収録。

§昭和17年(1942)

1月

ドリトル先生船の旅＝名作童話＝　＊翻訳

少年倶楽部　29巻1号　1月1日　p. 49～60

末尾に「(つゞく)」とある。なお，この回には，本文標題脇の「井伏鱒二」の下に「(原作ヒユー・ロフチング)」と原作者名が記されている。

2月

ドリトル先生船の旅＝名作童話＝　＊翻訳

少年倶楽部　　29巻2号　　2月1日　　p.45～56

末尾に「(つゞく)」とある。

＜題不明＞？

初出不明，執筆のみにとどまるか？　　2月2日執筆？

「南航大概記」(筑摩書房『増補版・井伏鱒二全集』第10巻所収）の2月2日の項に，「大毎の原稿十一枚，尾高少佐に検閲を受けてもらふため本部へ持つて行く。」(「徴用中のこと」第23回,『海』11巻7号・昭和54年7月1日，にも同様の記述が見える）とあるが，それらしきものは，少なくとも『大阪毎日新聞』には見えない。あるいは検閲を通らずに，執筆しただけにとどまるか。なお，この部分をはじめ,「南航大概記」と,「徴用中のこと」に引用された「日記」とは，字句の表現など細部は必ずしも完全に同一ではない。

マレー人の姿？

初出不明　　2月9日執筆？

本作は『大東亜戦争　陸軍報道班員手記（マレー電撃戦)』(文化奉公編・大日本雄弁会講談社・昭和17年6月15日）に収録されているが，別に初出誌紙があると思われる。それは，同書の「序」に「報道班員の手記は既に新聞雑誌等に発表されて国民の感激を昂めてゐるが，今これが編纂を文化奉公編に委嘱して刊行することにした」とあり，何編かの作品についてその初出誌紙が確認できるからである。しかしながら,『文芸年鑑』，福島壽郎・大久保久男編『大東亜戦争書誌』シリーズ大東亜戦争の記録1（日外アソシエーツ・昭和56年10月9日).同『戦時下の言論』(同・昭和57年3月10日）同2などには見えない。2月9日執筆と推定したのは，本作末尾近くに,「昨日，日本軍がパレンバンで敵機を大量に撃墜した。」とあり，「大本営九日発表」の記事を引用しているからである。このパレンバン空襲は,『マレー作戦(大東亜戦史)』(朝日新聞社・昭和17年11月8日，p. 280）によれば，昭和17年2月7，8日のことである。だから，末尾の「尤も，この日は日本軍にとつて，もう一つ別に非常な吉報があつたのである。」とあるのは，おそらく，ジョホール水道の敵前渡過によるシンガポール上陸成功を指しているであろう。＊マレー人が日本軍の「伝単」に書いてあった民族の自立を促すことばを見て「これは悪くない辻占のやうな気持がする」と言うように民族の独立を願っていること，マレーの義賊ジミー・ネルソンの子分・チャーリーのこと，マレーの風習マンデー（水浴）のこと，日本軍の進撃が予想以上に速かった結果イギリス軍が慌てて逃亡したこと，宿舎で雇った炊事夫のこと，マレー人の青年が日本軍のために大いに協力していること，などが挿話的に述べられている。いくつかは,「南航大概記」(筑摩書房『増補版・井伏鱒二全集』第10巻所収）に簡単に記されている記事と重なる。日本軍を歓迎するマレーの人々の姿が描かれていて，それを疑わせる要素はここには全くない。井伏は見聞した事実の一部を書き記したと思われ，もちろん，大言壮語や空疎な言辞がない点では，それなりの井伏の姿勢は守られてはいる。しかし，ここから漏れた事実に大きな意味があるだろうし，それを言外にさえほとんど示そうともしていない点におい

て，井伏の姿勢には疑問が持たれよう。すなわち，マレーの解放者として，日本軍は位置付けられているのであり（太平洋戦争開戦の際の日本側の口実でもあったのだが，それがそうでなかったことはその後の占領政策によって明らかである），この文章だけから判断するとき，「大東亜戦争の偉業を，皇軍将兵奮闘の実情と建設の全貌を知り得て，長期必勝の士気昂揚に資するところ極めて大なるものがある」（谷萩那華雄「序」，『大東亜戦争　陸軍報道班員手記（マレー電撃戦）』・大日本雄弁会講談社・昭和17年6月15日）というところに繋がっているわけである。ただし，戦時下の井伏の仕事全体から判断したとき，その評価がここにとどまるものではないことは，いうまでもないだろう。

沿道所見―郷土部隊に逢ふ―？

建設戦？　？号　2月12日？　？面

「南航大概記」（筑摩書房『増補版・井伏鱒二全集』第10巻所収）の1月8日の項，「郷土部隊」（『オール読物』18巻5号・昭和38年5月1日），「徴用中のこと」第18回（『海』11巻2号・昭和54年2月1日）に全文引用。それぞれ引用されたものには，若干の字句・表記に異同がある。「徴用中のこと」第18回に，この文章が「紙面に出たのは柳君が戦死した当日ではなかつたかと思ふ」とあり，同第6回（『海』10巻2号・昭和53年2月1日）に柳重徳の戦死が2月12日のこととして記載されている。執筆は，「南航大概記」によれば1月8日である。なお，「郷土部隊」では，「『建設戦』はタブロイド版の日刊紙で，マレー派遣の全軍団に向けて配布されていた。したがって投稿原稿は軟弱めいたものであってはいけない建前で，宣伝班の尾高少佐という副隊長がいちいち厳密に検閲した。私の書いたものは殆どみんな没になった。たった一度検閲を通ったのは短い随筆である。」として本作が紹介されている。

【一路平安（有光名作選集14）】

有光社　2月15日　B6判　口絵＜井伏鱒二筆跡写真＞1葉　本文323p.
定価1円30銭　装丁・吉田貫三郎

今日の問題社版（昭和15年9月5日，B6判，目次3p．本文379p．定価2円50銭，装丁・挿絵・吉田貫三郎）では，「閑吟塾」以下18章に分けられそれぞれ章名が付されていたが，本書では，「第一齣」以下「第十五齣」までというように変更されている。なお，口絵には，「なだれ」（『四季』22号《昭和11年11月号》・昭和11年10月20日）が，「なだれと題す」として，井伏自筆の写真版によって掲げられている。

【風貌姿勢（井伏鱒二随筆全集第3巻）】◎

春陽堂書店　2月18日　B6判　目次3p．本文264p．＜「あとがき」は本書にはない＞　定価2円　装丁・野間仁根

＜収録作品＞

風貌・姿勢　※	p. 1～38		中島直人	p. 148～157
志賀直哉と尾道	p. 39～47		天民翁記	p. 158～160
朝の散歩と平野屋	p. 48～52		坪内逍遥先生	p. 161～167
先輩訪問記（つくりばなし）	p. 53～59		葛西善蔵忌に際し	p. 168～172
			サンセイ・バー	p. 173～174
場面の効果	p. 60～68		戸山学校の森	p. 175～182
映画と石山龍嗣	p. 69～74		所有権と保管品	p. 183～189

肩車	p. 75～ 80	平野屋の蒙つた被害	p. 190～198
中島健蔵に	p. 81～ 90	紀州の人	p. 199～204
四十雀	p. 91～ 93	友人安行君の性格	p. 205～210
早春感傷記	p. 94～100	痛恨痛惜事	p. 211～216
早稲田生活	p. 101～122	モデル供養	p. 217～226
青瑛玗	p. 123～131	噂ばなし	p. 227～232
坪田譲治――風貌姿勢――	p. 132～135	追想	p. 233～237
初めて逢つた文士	p. 136～143	正帽　※	p. 238～241
竹縄	p. 144～147	五三郎君に関する記	p. 242～264

収録作品中,「映画と石山龍嗣」は本文標題では「映画と石川龍嗣」となっているが,本文中には「石山龍嗣」と記されているため，目次の標題を採り「映画と石山龍嗣」と改めて掲出しておいた。

3月

ドリトル先生船の旅＝名作童話＝　＊翻訳

少年倶楽部　　29巻3号　　3月1日　　p. 49～60

末尾に「(つゞく)」とある。

＜題不明・英文＞？

THE SYONAN TIMES（昭南タイムズ）？

12号？　　3月3日？　？面

「南航大概記」(筑摩書房『増補版・井伏鱒二全集』第10巻所収）の3月3日の項に,「日本の雛祭に関する紹介記事を書いた。古山君がマネーを助手につかつてそれを翻訳して新聞に出した。」とある。また,「徴用中のこと」第25回(『海』11巻9号・昭和54年9月1日）に「昭南タイムズは日曜祭日も休刊なしの日刊で，二月二十日に第一号を出した。」とあり，3月3日発行分掲載とすれば12号と推定される。THE SYONAN TIMES（昭南タイムズ）は,「南方軍政下海外発行紙誌保存状況調べ」（鈴木静夫・横山真佳編著『神聖国家日本とアジア――占領下の反日の原像――』・勁草書房・昭和59年8月15日・p. 216～226）にも掲出されていず，所在不明。

＜お知らせを迄ふ・英文＞

THE SYONAN TIMES（昭南タイムズ）？

22号？　　3月13日？　？面

「徴用中のこと」第6回（『海』10巻2号・昭和53年2月1日）に「芦田中尉の捜してゐる飛行機の墜落場所は，新聞広告で読者に呼びかけて投書で知らせを求めることにした。これなら穏当なやりかただと思はれた。それでチャンギの敵性人収容所から昭南タイムズ社に帰つて来ると＜3月13日――編者注＞，すぐ私の書いた広告文を古山君が英訳して印刷にまはした。『お知らせを乞ふ』といふタイトルである」とある。THE SYONAN TIMES（昭南タイムズ）は，「南方軍政下海外発行紙誌保存状況調べ」(鈴木静夫・横山真佳編著『神聖国家日本とアジア――占領下の反日の原像――』・勁草書房・昭和59年8月15日・p. 216～226）にも掲出されていず，所在不明。

4月

ドリトル先生船の旅＝名作童話＝　＊翻訳

少年倶楽部　　29巻4号　　4月1日　　p. 33～44

末尾に「(つゞく)」とある。

アブバカとの話＝マレー戦線に拾う・明朗現地報告＝　⑩

モダン日本　13巻4号　4月1日　p. 24～26

本文・目次には井伏鱒二の肩書が「マレー軍報道班員」とある。筑摩書房『増補版・井伏鱒二全集』第10巻の米田清一「解題」には，単行本未収録とあるが，『大東亜戦争　陸軍報道班員手記（マレー電撃戦）』（大日本雄弁会講談社・昭和17年6月15日）に収録されている。

5月

ドリトル先生船の旅＝名作童話＝　＊翻訳

少年倶楽部　29巻5号　5月1日　p. 45～52

末尾に「(つゞく)」とある。

6月

ドリトル先生船の旅＝名作童話＝　＊翻訳

少年倶楽部　29巻6号　6月1日　p. 45～52

末尾に「(つゞく)」とある。

＜題不明・童話＞？

サクラ？　1号？　6月10日？　？面

『サクラ』は軍宣伝班発行の，現地児童向け片仮名新聞。神保光太郎『昭南日本学園』(愛之事業社・昭和18年8月5日・国立国会図書館蔵）p. 133に「片仮名新聞『サクラ』の方は，前に述べた発刊の目的に次いで，具体案を練り，小型四頁とし，(略)策二面と第三面には，誰か，この土地で知名の日本人に，現地住民に与へるといつたやうな言葉を寄稿してもらふ。(略)その他，童話や漫画などを容れる。第一号には井伏さんに頼んで童話を書いてもらつた。」とある。この作品に関して，『大阪毎日新聞』(21269号・昭和17年6月18日付朝刊3面・名古屋市鶴舞中央図書館蔵）の，「昭南本社特派員，16日発」とする記事「昭南島にカタカナ新聞」中に「十日から陸軍〇〇班の手で『サクラ』と題するサンデー毎日型の片仮名新聞が発行された，今のところ旬刊の予定で第一号には大達昭南特別市長の訓話，軍〇〇班井伏鱒二氏の童話等が片仮名で載つてゐる，」とあり，6月10日と推定した。『サクラ』は，「南方軍政下海外紙誌保存状況調べ」(鈴木静夫・横山真佳編著『神聖国家日本とアジア――占領下の反日の原像――』・勁草書房・昭和59年8月15日・p. 216～226）にも掲出されていず，所在不明。

【大東亜戦争　陸軍報道班員手記（マレー電撃戦）】

文化奉公会編　大日本雄弁会講談社　6月15日　1000部　B6判　口絵1葉　前付8p.　本文316p.　定価1円50銭　装丁・笹岡了一　口絵・栗原信

＜目次＞

詔書＜開戦の詔書＞		前付p.　1～　2
序	大本営陸軍報道部長／陸軍大佐　谷萩那華雄	前付p.　3～　5
目次		前付p.　6～　8
マレー西岸部隊	堺　誠一郎	p.　3～29
タイピンからカンパルまで	松本　直治	p. 30～42
架橋部隊	里村　欣三	p. 43～49

イポーからクアラ・ルムプールへ——西海岸戦線を征く——
柳　重徳　p. 50～ 57
魂の進撃　里村　欣三　p. 58～ 73
スリム殲滅戦——死すとも銃を放さず——　S報道班員　p. 74～ 80
ゲマス＝セガマトの激闘　里村　欣三　p. 81～ 95
セレンバンの母——馬来戦に活躍する日本少女——田中　英　p. 96～104
彼南から（第一信）　寺崎　浩　p. 105～124
彼南から（第二信）　寺崎　浩　p. 125～141
ラビス戦線にて　松本　直治　p. 142～150
肉弾の突進　堺　誠一郎　p. 151～159
コタバル上陸戦——砂上，動くは銃剣のみ——　N報道班員　p. 160～165
ジョホール海峡渡過の前夜——新嘉坡攻略戦迫る時——
柳　重徳　p. 166～177
月下の前線にて　里村　欣三　p. 178～183
醜の御楯——ジョホール水道敵前上陸記——　里村　欣三　p. 184～188
ブキテマの丘で　柳　重徳　p. 189～190
歴史の変る一瞬　松本　直治　p. 191～194
歴史的会見を観たり——シンガポール最後の日——
里村　欣三　p. 195～210
敗残の敵　中村　地平　p. 211～224
戦線点描　栗原　信　p. 225～227
アブバカとの話　井伏　鱒二　p. 228～235
サニー　中村　地平　p. 236～245
戦線微笑記——マレー従軍日記より——　北町　一郎　p. 246～265
マレー人の姿　井伏　鱒二　p. 266～276
森の中の歌——マレーのパントン——　中村　地平　p. 277～290
マレー攻略戦を顧みて
陸軍省報道部／陸軍少佐　平櫛　孝　p. 291～311
マレー方面帝国陸軍作戦日誌　＜無署名＞　p. 312～316

本書は『大東亜戦争陸軍報道班員手記』の第一輯（第二輯『バタアン・コレヒドール攻略戦』，第三輯『ビルマ戡定戦』，第四輯『ジャワ撃滅戦』，第五輯『ビルマ建設戦』，第六輯『従軍随想』。以上，第六輯『従軍随想』・大日本雄弁会講談社・昭和18年6月28日，の後付広告による）である。「序」には，次のように，「報道班員」の役割と，本書の編集意図が述べられている。「陸軍報道班員の使命は，現地における宣伝と宣撫工作を第一義としてゐ」て，「戦線いたるところの諸民族がわが征戦の意義を真に理解して皇軍に協力し，新生アジアの建設に努力しつつある」ところにその成果の一つがある。「第二の使命は報道であ」って，「前線将兵の奮闘の状況，又は建設宣撫等の実情を，或はペンに或は彩管に或は写真によつて報道して国民の戦意を強化し，その決意を振起し，その士気を昂揚せしむる使命を有してゐる。」そして，「報道班員の手記は既に新聞雑誌等に発表されて国民の感激を昂めてゐるが，今これが編纂を文化奉公会に委嘱して刊行することにしたのは，前古未曾有のこの大勝利の記録を永く後世にまで語り伝へると同時に，大東亜戦争の偉業を，皇軍将兵

奮闘の実情と建設の全貌を知り得て，長期必勝の士気昂揚に資するところ極めて大なるものがあると確信するがためである。」としている。

親子かうもり＝マレーからのたより＝

週刊少国民　　1巻7号（通巻7号）

6月28日号　　6月28日　　p. 14

本文には井伏鱒二の肩書が「陸軍報道班員」とある。挿絵は黒崎義介。末尾に「（五月二十八日）」とある。「蝙蝠」（筑摩書房『増補版・井伏鱒二全集』第11巻所収，「私の動物誌」の内）に，ほぼ同様の内容を記し，「この話を，私はシンガポールで原稿に書いて日本の新聞に出した。」とあるが，『週刊少国民』は朝日新聞社発行の子ども向け週刊誌である。あるいは，別文があるか。＊来月から「昭南日語学園で，毎週土曜日に日本歴史のあらましを講義することになつた」私は，日語学園「の分校になつてゐる昭南児童学園も参観した。」そこでは，「ふと自分が内地の小学校を訪ねて来てゐるのではないかといふ錯覚をおこした」ほど，こどもたちが，「完全な発音」で「君が代」を合唱しているのが聞こえてくる。「この児童学園に，四十歳前後のマレー人の学僕（こづかひ）がゐる。」かれは，「ほんとに小さな蝙蝠の子供が，死んだ蝙蝠の腹にしがみつき，何か一心にその母体の乳房を吸つてゐる」のを私に示し，蝙蝠の母親は，こどもを振り放せば助かったのに，そうはしなかったのだ，と言う。「つまりこの一対の蝙蝠を，児童たちのため教材につかつたらどうだらうかといふのだらう。」と私は思う。そこで，「私は彼のその助言は大いに参考になり得ると彼に答へた。」なお，「蝙蝠」では，「昭南学園」や「マレー人の学僕（こづかひ）」ではなく，「あるとき徴員事務所の裏手のマライ人小学校に行くと，マライ人の校長が死んだカウモリを私に見せ」云々と，「マライ人小学校」や「マライ人校長」になっている。本作が「蝙蝠」にいうのと同一のものであるとすれば，この相違は，占領地から内地の児童に向けた潤色がなされているか否かというところにある，と思われる。

＜題不明・英文＞？

THE SYONAN TIMES（昭南タイムズ）？

？号　　6月？　　？面

「昭南日記」（筑摩書房『増補版・井伏鱒二全集』第10巻所収）の6月17日の項に，「チョンといふ未知の現地人と，チンナイアといふ未知の現地人から手紙が来た。いづれも昭南タイムズ紙掲載の私の投稿文について寸評をこころみ，……」とある。THE SYONAN TIMES（昭南タイムズ）は，「南方軍政下海外発行紙誌保存況調べ」（鈴木静夫・横山真佳編著『神聖国家日本とアジア――占領下の反日の原像――』・勁草書房・昭和59年8月15日・p. 216～226）にも掲出されていず，所在不明。

7月

ドリトル先生船の旅＝名作童話＝　＊翻訳

少年倶楽部　　29巻7号　　7月1日　　p. 41～52

末尾に「（つゞく）」とある。

8月

ドリトル先生船の旅＝名作童話＝　＊翻訳

少年倶楽部　　29巻8号　　8月1日　　p. 41～52

末尾に「（つゞく）」とある。

作者の言葉―昭南市にて―　＝次の朝刊小説　花の街　井伏鱒二作　野間仁根画＝

東京日日新聞　大阪毎日新聞　朝刊　　8月13日　　3面

「花の街」連載予告。前田貞昭「井伏鱒二・その戦時下抵抗のかたち――『花の町』を軸にして――」(『近代文学試論』20号・昭和58年6月1日。のち,磯貝英夫編『井伏鱒二研究』・溪水社・昭和59年7月10日，学術文献刊行会編『国文学年次別論文集』近代3・朋文出版・昭和60年6月，に再録),都築久義「『花の町』＝作品の世界＝」(『国文学　解釈と鑑賞』50巻4号・昭和60年4月1日）に全文引用。＊「近く完結する吉屋信子氏の『新しき日』の後をついで，井伏鱒二氏が『花の街』を遠く南方の任地から執筆することとなつた。井伏氏は最も日本的意気の横溢せる作家にして，その作品は飄逸掬すべき詩味に溢れてゐます。／昨年末，大東亜戦争の勃発するや同氏は直に陸軍報道班員としてマレー戦線に従軍したのでありますが，この歴史的一大変革の中から摑んだ創作への熾烈な情熱は，軍務の余暇，遂にこの『花の街』の大作を結実させたのであります。／『花の街』は戦争の渦中にあつて明るい希望を抱いて起ち上る昭南市のある市民のささやかな生活面を主材とし，その背景に澎湃と漲るアジヤ民族興隆の姿を描破した従軍作家最初の巨弾であります。／挿絵は二科会の重鎮として異色ある画風に鳴る野間仁根氏，文と相俟ち必ずや新聞小説界に一新紀元を劃するものと信じ，読者諸氏の御愛読を期待する次第であります。」以上無署名予告記事全文。「昭南市はいま非常に平和である。非常によく治まつてゐる。嘘ではないかと思はれるほどに平和である。(これではもつたいないほど平和ではないか）街を歩いてゐても，宿舎にゐても，私の念頭から去らないのはこの一事である。しかしこの平和の街にも不幸な人もあり，また幸福を感じてゐる人もあらう。それはいふまでもないことである。／私はこの市内におけるある長屋のある一家族の動きを丹念に描写して，疑ひなくこの街の平和を信ずる市民のあることを知る一つの資料としたいのである。」以上井伏「作者の言葉」全文。

花の街　第1回　　マルセンの旦那　（一）　③[33]

東京日日新聞　大阪毎日新聞　朝刊　　8月17日　　2面

挿絵は野間仁根。途中，各一回の新聞休刊日と休載を除いて，10月7日まで連載。『花の町』(文芸春秋社・昭和18年12月25日）初収録の際に「花の町」と改題。掲載紙面は『大阪毎日新聞』(名古屋市鶴舞中央図書館蔵）による。以下同様。

花の街　第2回　　マルセンの旦那　（二）

東京日日新聞　大阪毎日新聞　朝刊　　8月18日　　4面

花の街　第3回　　マルセンの旦那　（三）

東京日日新聞　大阪毎日新聞　朝刊　　8月19日　　4面

花の街　第4回　　マルセンの旦那　（四）

東京日日新聞　大阪毎日新聞　朝刊　　8月20日　　4面

花の街　第5回　　マルセンの旦那　（五）

東京日日新聞　大阪毎日新聞　朝刊　　8月21日　　4面

花の街　第6回　　マルセンの旦那　（六）

東京日日新聞　大阪毎日新聞　朝刊　　8月22日　　4面

花の街　第7回　　五十五番館　（一）

東京日日新聞　大阪毎日新聞　朝刊　　8月23日　　4面

花の街　第8回　　五十五番館　（二）

東京日日新聞　大阪毎日新聞　朝刊　　8月24日　　2面

花の街　第９回　五十五番館　（三）
　東京日日新聞　大阪毎日新聞　朝刊　8月25日　4面
花の街　第10回　五十五番館　（四）
　東京日日新聞　大阪毎日新聞　朝刊　8月26日　4面
花の街　第11回　五十五番館　（五）
　東京日日新聞　大阪毎日新聞　朝刊　8月27日　4面
花の街　第12回　五十五番館　（六）
　東京日日新聞　大阪毎日新聞　朝刊　8月28日　4面
花の街　第13回　五十五番館　（七）
　東京日日新聞　大阪毎日新聞　朝刊　8月29日　4面
花の街　第14回　五十五番館　（八）
　東京日日新聞　大阪毎日新聞　朝刊　8月30日　4面
花の街　第15回　五十五番館　（九）
　東京日日新聞　大阪毎日新聞　朝刊　8月31日　2面

9月

昭南日記　⑩[22]
　文学界　＜再刊＞9巻9号　9月1日　p.108～125

『マライの士（作家部隊随筆集）』（新紀元社・昭和18年3月5日）に初収録。筑摩書房増補版全集と初出誌を比較すると，全集においては,「六月二十七日」の三分の一・約700字分,「七月一日」の八分の一・約300字分,「七月三日」の四分の一・約300字分,「七月四日」の全文・約1200字分,「七月九日」の二分の一・約900字分が削除されている（正確には，全集の底本となった『昨日の会』・新潮社・昭和36年2月10日＜第2刷・昭和36年4月10日による＞，の段階においての削除である)。削除されているのは，①昭南学園での歴史の講義に関する記事(「六月二十七日」，「七月四日」)，②太宰治からの来簡に関する記事(「七月一日」)，③長兄の死を知らせる嫂からの来簡に関する記事（「七月三日」)，④かつて,「敵性グラフの写真に関し」，井伏たちを連れて「チヤンギの敵性人収容所を訪ねて調査した」芦田中尉から，五個月ぶりに来簡があったという記事（「七月九日」)，以上，四項目の記事である。①④に関しては「徴用中のこと」にも記述されているし，削除部分においても戦時下の曲筆舞文があるようにも思われない。もっとも，この①④の部分に関わる井伏の行為には，他の部分に比べれば，日本軍のシンガポール占領体制・政策への積極的な協力の色合が濃いことは否めない。そこに，戦後における削除の理由があるのだろうか。②には，太宰の手紙を評して,「そして彼自身は純文学の孤城を守るつもりであると報じてゐた。云ふは易く行ふは難いのである。だが私はたいへん心づよく思ひ，その書信を封筒にをさめながら，孤城を守るといふ文字も決して古くさくないと思つた。いまここにゐる私たちの流行語でいへば，決してナフタリンくさくないのである。」という個所があり，また，③には,「私は老母の悲嘆を思ひ，しかし私の読みちがひであるやうにと念じながらくりかへし読んでみた。おそるおそる読みなほしたが，ほかに解釈する余地のない文面である。思ひあまつて眼鏡を取りはづすと，ぽたぽたと涙が肘の上に落ちた。」とあって，それぞれ感情の振幅がやや大きくなっている。感傷を避けようとする井伏の潔癖は，それを許さなかったのであろうか。私には一個の記録として，価値あるように思われるのだが。

解説

『井伏鱒二集』新日本文学全集第10巻

改造社　　9月1日　　p. 359～360

木山捷平「井伏鱒二」(『群像』19巻10号・昭和39年10月1日）によれば，「解説」・「略歴」(次項）ともに，昭和16年11月20日の晩，すなわち井伏が徴用されて東京を出発する前夜に書かれた筈だという。木山は,「おそらく改造社の方で井伏氏の出征を知つて，本の編輯から解説略歴と短時日のうちに完了をせかしたものであろうが，そういうせつぱつまつた時間にかかれた氏の名文の一として，私は以上写し取つて見たのである。」と,「略歴」の方を引用，紹介している。＊「『さざなみ軍記』は昭和二三年頃にその発端を書き，それから一二年置いてその続きを書き，それから又一二年置いてその続きを書き，約十年ぶりにその完末の書を書いた。これは私がこの作品に対して情熱がなかつたからではない。この小説の主人公――平家の或る公達が戦乱に際し周囲の荒涼たる有様によつて急速度に心が大人びてゆく姿を書き，有為転変の激しさを現はさうと思つたからである。しかし私の力量ではそれが現せないと思つたので，自分自身が少しでも経験をつむのを利用して，戦乱で急激に大人びてゆく主人公の姿を出す計画であつた。しかしながら，あながちその予定通りに物語がはかどつたとは思はない。／『多甚古村』は或る巡査の手記を素材にして，私の好みに適した一人の巡査を書くつもりであつた。別に筋書もない作品で，ちよつと随筆風な感じもあると思つてゐる。もともと材量を豊富に提供されてゐたために，私はかなりたのしい気持で書くことができた。『多甚古村補遺』もやはり同じやうな事情のもとに書いた。／『鯉』は震災の翌年，随筆雑誌に出すために書いた。そのころ私は自分の未来に希望を持つてゐなかつたので，そのためか，いま読みなほしてもなんだか仄暗いやうな気持である。／『山椒魚』は私の処女作である。早稲田の予科二年の夏休みに書いた習作の一つである。これは余程後になつてから雑誌に出した。／『ジョン万次郎』は記録文学といふ名称のもとに書いた。実話読物の部類に属すると思つてゐる。／『へんろう宿』は土佐の宿屋で書いた。バスで室戸崎に行く途中，『右，へんろう道』といふ道標をみて，遍路さんのことを『へんろう』といふのだと気がついた。『へんろう宿』といふ宿は見なかつたが，遍路の泊る木賃宿はバスで通りすがりに見た。私はその木賃宿に泊つたものと仮定して，この短篇を書いた。私はたいていこのやうに自分がそこにゐたものと仮定して短篇を書く，この集の他の短篇もさういふ事情のもとに書いた。これは最近までの私の一つの癖であつた。」以上全文。(木山文の存在等については，寺横武夫氏の御教示によった。）次項参照。

略歴

『井伏鱒二集』新日本文学全集第10巻

改造社　　9月1日　　p. 361～363

本「略歴」中には井伏鱒二の著書の一覧が付されている。＊「私は明治三十一年二月十五日に生れた。場所は広島県深安郡加茂村字粟根八十九番邸。父は備中西江原の大山壽久平の弟郁太。母は井伏美耶。つまり父は婿である。私の六つのときに父は亡くなつたが，私たち兄弟に決して文学をさしてはいけないと言ひおいて亡くなつたさうである。これは父が文学者にならうとして失敗したからであらう。私の田舎の生家には，いまも父の書いたまづい文章がのこつてゐる。／村の小学校を出て

から福山中学に行つた。それから東京に出て早稲田の文科に入学した。早稲田の学生生活は非常にたのしかつた。講義は吉田絃二郎先生の講義を聞くのが一番たのしかつた。なにしろ先生は教室に息詰るほどのリリシズムをもたらしたのである。しかし本科二年のとき，或るつまらない意地から学校を止すことにした。そのころ一方では日本美術学校にも通つてゐた。しかし絵を描くのもいやになり画描きにならうといふつもりもなかつたので，早稲田を止すと同時に美術学校も止した。／その後，数年間といふものは漠然と小説を発表したいといふ気持で暮らしてきた。」以上全文。前項参照。

【井伏鱒二集（新日本文学全集第10巻）】

改造社　9月1日　113000部　B 6判　口絵＜執筆中の井伏鱒二写真・井伏鱒二筆跡写真，各一枚＞1葉　目次2p.　本文358p.　解説2p.　略歴3p.　予約定価1円50銭　装丁・佐野繁次郎

＜収録作品＞

さざなみ軍記	p. 1～ 97	「槌ツア」と「九郎ツアン」は喧嘩して私は用語について煩悶すること	p. 329～337
多甚古村	p. 99～196	掏摸の桟三郎	p. 339～350
多甚古村補遺	p. 197～238	へんろう宿	p. 351～358
ジョン万次郎漂流記	p. 239～309		
鯉	p. 311～317		
山椒魚	p. 319～327		

口絵に掲げられた筆跡写真には，「私は樹木が好きである／特に竹柏樟白槙棗の／木などに愛着を持つてゐ／る／井伏鱒二」とある。なお，これは，「樹木（一）――白槙に寄せて――」（『東京朝日新聞』昭和11年6月17日付朝刊）中のことばから採られたものである。収録作品中，「『槌ツア』と『九郎ツアン』は喧嘩して私は用語について煩悶すること」は，のちに「『槌ツア』と『九郎治ツアン』は喧嘩して私は用語について煩悶すること」と改められるが（作中では「九郎ツアン」ではなく「九郎治ツアン」となっている），この時点ではまだ訂正されないので，本文の標題のままに掲げた。

ドリトル先生船の旅＝名作童話＝　＊翻訳

少年倶楽部　29巻9号　9月1日　p. 41～52

末尾に「（つゞく）」とある。

花の街　第16回　緑陰　（一）

東京日日新聞　大阪毎日新聞　朝刊　9月1日　4面

花の街　第17回　緑陰　（二）

東京日日新聞　大阪毎日新聞　朝刊　9月2日　4面

花の街　第18回　緑陰　（三）

東京日日新聞　大阪毎日新聞　朝刊　9月3日　4面

花の街　第19回　緑陰　（四）

東京日日新聞　大阪毎日新聞　朝刊　9月4日　4面

花の街　第20回　緑陰　（五）

東京日日新聞　大阪毎日新聞　朝刊　9月5日　4面

花の街　第21回　緑陰　（六）

東京日日新聞　大阪毎日新聞　朝刊　9月6日　4面

花の街　第22回　緑陰　（七）

東京日日新聞　大阪毎日新聞　朝刊　　9月7日　　2面
花の街　第23回　　ベン・リョンの家（一）
東京日日新聞　大阪毎日新聞　朝刊　　9月8日　　4面
花の街　第24回　　ベン・リョンの家（二）
東京日日新聞　大阪毎日新聞　朝刊　　9月9日　　4面
花の街　第25回　　ベン・リョンの家（三）
東京日日新聞　大阪毎日新聞　朝刊　　9月10日　　4面
花の街　第26回　　ベン・リョンの家（四）
東京日日新聞　大阪毎日新聞　朝刊　　9月11日　　4面
花の街　第27回　　ベン・リョンの家（五）
東京日日新聞　大阪毎日新聞　朝刊　　9月12日　　4面
花の街　第28回　　ベン・リョンの家（六）
東京日日新聞　大阪毎日新聞　朝刊　　9月13日　　4面
花の街　第29回　　ベン・リョンの家（七）
東京日日新聞　大阪毎日新聞　朝刊　　9月14日　　2面
花の街　第30回　　ベン・リョンの家（八）
東京日日新聞　大阪毎日新聞　朝刊　　9月15日　　4面
花の街　第31回　　ベン・リョンの家（九）
東京日日新聞　大阪毎日新聞　朝刊　　9月16日　　4面
花の街　第32回　　ベン・リョンの家（一〇）
東京日日新聞　大阪毎日新聞　朝刊　　9月17日　　4面
花の街　第33回　　ベン・リョンの家（一一）
東京日日新聞　大阪毎日新聞　朝刊　　9月18日　　4面
花の街　第34回　　ジャランジャラン（一）
東京日日新聞　大阪毎日新聞　朝刊　　9月19日　　4面
花の街　第35回　　ジャランジャラン（二）
東京日日新聞　大阪毎日新聞　朝刊　　9月20日　　4面

【仲秋明月（詩集）】◎

地平社　　9月20日　　限定1000部　　菊判　　目次3p.　本文58p.　　定価1円80銭　特別行為税相当額8銭　合計1円88銭

＜収録作品＞

なだれ	p. 6～7	寒夜母を思ふ	p. 20～23
歳末閑居	p. 8～9	顎	p. 24～25
石地蔵	p. 10～11	泥酔	p. 26～27
逸題	p. 12～13	紙凧のうた	p. 28～29
つくだ煮の小魚	p. 14～15	山の図に寄せる	p. 30～33
冬の池畔――甲州大正池――	p. 16～17	かなめの生垣	p. 34
		田園記	p. 35～50
按摩をとる	p. 18～19	中島健藏に	p. 51～61

以上，刊行部数は永田龍太郎編『井伏鱒二文学書誌』（永田書房・昭和47年8月20日）による。それ以外は、昭和18年9月10日発行の再版による。再版には上記のように，「特別行為税相当額8銭」の表示があるが（『井伏鱒二文学書誌』にも同様に表示），

この特別行為税は昭和18年３月15日公布、同年４月１日施行のもので、庄司徳太郎・清水文吾編『資料年表　日配同時史』(出版ニュース社・昭和55年10月13日)「第３部年表」の昭和18年４月１日の項にも,「特別行為税施行により，本日以降に印刷，製本の出版物は売価にこれを加え，奥付に定価㊙，特別行為税相当額，合計額を記載することに変更」とあるところから，本書初版の時点では，この表示はなかったものと推定される。また,『井伏鱒二文学書誌』によれば，初版1000部のみの限定版のように受け取れるが，実際には,「刊行部数一千冊」とする再版がある。なお,「田園記」には,「私は親父の本箱のなかをかきまはして，和綴ぢのノートブックをとり出し，かねがね私の愛誦してゐた漢詩が翻訳してあるのを発見した」として,「題袁氏別業」「照鏡見白髪」「送朱大入秦」「春暁」「洛陽道」「長安道」「復愁」「逢俠者」「答李澣」「聞雁」の原詩と訳詩が掲載されている。また,「中島健藏に」には,「静夜思」「田家春望」「秋夜寄丘二十二員外」「別盧秦卿」「勧酒」「古別離」「登柳州峨山」の原詩と訳詩が掲載されている。

花の街　第36回　　ジヤランジヤラン（三）

東京日日新聞　大阪毎日新聞　朝刊　　９月21日　　２面

サザエ　ト　フカ

サクラ　　11号？　　９月21日？　　３面

『サクラ』は軍宣伝班発行の，現地児童向け片仮名新聞。神保光太郎『昭南日本学園』(愛之事業社・昭和18年８月５日・国立国会図書館蔵)p. 285掲載。同書の資料として掲載されている『サクラ』が同一日付のものと推定されるので，この日付を採った。冒頭に「ムカシ　ムカシ」という定型的な語り出しがあり，末尾に「フカハソレカラドウシタデショウ（ツヅク）」とあるので，これが連載の第一回と推定される。また,『サクラ』に関するものではないが，同書に次のような部分があり，井伏文について触れているので掲げておく。「現地各国語の新聞はそれぞれ，宣伝班の人達が，指導してゐたのであるが，（略）／又，新聞は私達を動員して，日本語に関するエッセーを書いてもらふことにし，中島健藏，井伏鱒二，又は私といつたやうな人達が寄稿した。」(p. 35～36)。『サクラ』は,「南方軍政下海外発行紙誌保存状況調べ」（鈴木静夫・横山真佳編著『神聖国家日本とアジア――占領下の反日の原像――』・勁草書房・昭和59年８月15日・p. 216～226）にも掲出されていず，所在不明。＊シンガポールにいるフカが日本まで何度往復できるか，サザエと競走する。ところが，日本の海までフカが泳ぎつくと，そこには，シンガポールで見たのと少しも変わらないサザエがいた。フカは驚いてシンガポールに引き返す……という昔話にしばしば見受けられる動物競走譚である。この回しか見られないため，単なる翻案以上の展開があるか否かは不明である。

花の街　第37回　　ジヤランジヤラン（四）

東京日日新聞　大阪毎日新聞　朝刊　　９月22日　　４面

花の街　第38回　　ジヤランジヤラン（五）

東京日日新聞　大阪毎日新聞　朝刊　　９月23日　　４面

花の街　第39回　　ジヤランジヤラン（六）

東京日日新聞　大阪毎日新聞　朝刊　　９月24日　　４面

＊９月25日付の朝刊は発行されていない。９月24日付夕刊（９月23日発行）に，24日が休刊日のため25日付朝夕刊（24日発行の夕刊および25日発行の朝刊）を休刊とする旨の社告があ

る。
花の街　第40回　　ジヤランジヤラン（七）
　東京日日新聞　大阪毎日新聞　朝刊　　9月26日　　4面
花の街　第41回　　善隣協会（一）
　東京日日新聞　大阪毎日新聞　朝刊　　9月27日　　4面
＊9月28日付朝刊は発行されているが,「花の街」は掲載されていない。
花の街　第42回　　善隣協会（二）
　東京日日新聞　大阪毎日新聞　朝刊　　9月29日　　4面
花の街　第43回　　善隣協会（三）
　東京日日新聞　大阪毎日新聞　朝刊　　9月30日　　4面

10月

ドリトル先生船の旅＝名作童話＝　＊翻訳
　少年倶楽部　　29巻10号　　10月1日　　p. 41～52
　　末尾に「(つゞく)」とある。
花の街　第44回　　善隣協会（四）
　東京日日新聞　大阪毎日新聞　朝刊　　10月1日　　4面
花の街　第45回　　善隣協会（五）
　東京日日新聞　大阪毎日新聞　朝刊　　10月2日　　4面
花の街　第46回　　善隣協会（六）
　東京日日新聞　大阪毎日新聞　朝刊　　10月3日　　4面
花の街　第47回　　善隣協会（七）
　東京日日新聞　大阪毎日新聞　朝刊　　10月4日　　4面
花の街　第48回　　善隣協会（八）
　東京日日新聞　大阪毎日新聞　朝刊　　10月5日　　2面
花の街　第49回　　善隣協会（九）
　東京日日新聞　大阪毎日新聞　朝刊　　10月6日　　4面
花の街　第50回　　善隣協会（一〇）
　東京日日新聞　大阪毎日新聞　朝刊　　10月7日　　4面
　　末尾に「(完)」とある。

11月

ドリトル先生船の旅＝名作童話＝　＊翻訳
　少年倶楽部　　29巻11号　　11月1日　　p. 41～52
　　末尾に「(つゞく)」とある。

【星空】
　昭南書房　　11月5日　　5000部　　B6判　　本文313p.　　定価2円
　＜収録作品＞
　星空　　p. 1～313
　　永田龍太郎編『井伏鱒二文学書誌』(永田書房・昭和47年8月20日）が，発行日付を11月25日としているのは誤りである。なお，本「星空」は，「星座」(『中外商業新報』・昭和15年3月19日～10月11日）を，初刊単行本である本書に収録する際に改題したものである。なお，従来の年表類が「星座」の連載を昭和15年4月～7月としているのは誤りである。

12月

ドリトル先生船の旅＝名作童話＝　＊翻訳

少年倶楽部　29巻12号　12月1日　p. 41～52

末尾に「(をはり)」とある。編集部によると推測される次のような文章が最後にある。「ドリトル先生も，なつかしい故郷に帰つて来ましたので，ここでをはりました。二年もの長い間，毎号一生けんめいにお書き下さつた井伏先生と，さしゑの河目先生に，厚くお礼を申上げませう。」

＊徴用中のこと」第9回（『海』10巻5号・昭和53年5月1日）には「私たちがマレーにゐるときには，従軍中にもシンガポールに入つてからも，内地の新聞雑誌社へ送る原稿は，いちいち宣伝班の尾高少佐から検閲を受けなければいけなかつた。私の書くものは，遊びの気分に傾き戦意高揚の気に乏しいとのことで，たいてい五回に四回ぐらゐの割で検閲を通らなかつた。その落第原稿は徴用解除のとき一まとめして日本に持ち帰つたが，敗戦直後，進駐軍から発せられた緊急命令で，戦地での古原稿の束は燃してしまつた。／(略) 従軍手帳，徽章のほか，尾高少佐が赤鉛筆で『没』をつけた原稿の束，『日本時代史』の端本三巻を風呂釜の下で燃した。ほかに，戦地で書いて日本の新聞雑誌に出した雑文のうち，新橋の昭南書房で一冊分まとめて組んでゐた校了の校正刷も燃した。」とあり（この原稿焼却については，伴俊彦「井伏さんから聞いたこと」その八・『井伏鱒二全集第8巻月報10』・昭和40年6月，に「井伏さんが，原稿を出版社に渡して，遂に陽の目を見なかった本が二冊ある。一冊は戦争中，マレーに徴用された時の随筆，雑文，記録に，一緒に行っていた東京新聞のカメラマン石井幸之助氏の撮影した写真を添えて，昭南書房から出版する筈であった。(略) 校了紙は一応持って居られたのだか，(略)この校了誌もそれに該当すると思われ，風呂のたきつけにされてしまつたとのことである。」という聞書きもある。），また，「徴用中のこと」第23回(『海』11巻7号・昭和54年7月1日）には「二月二日／背骨が痛い。／大毎の原稿十一枚，尾高少佐の検閲を受けに本部へ持つて行く。(私たちは従軍中も入城後も，新聞社関係の特派員からときたま原稿を頼まれたが，私の原稿は検閲で没書になるのが多かつた。たいてい没書になつた。その原稿は，そのつどリュクサックに蔵つて置き，日本に帰るとき束ねて持ち帰つた。今，その古原稿で当時の記憶を呼び起しながら，この原稿『徴用中のこと』を書いてゐる。）」とあって，没原稿の後始末については矛盾が見られるにしろ，ここに掲出したもの以外にも原稿を執筆していると推定される。しかしながら，詳細は不明である。

§昭和18年(1943)

1月

ゲマスからクルーアンへ　⑩

文芸春秋　21巻1号　1月1日　p. 136～141

本文には井伏鱒二の肩書が「陸軍報道班員」とある。「徴用中のこと」第4回(『海』9巻12号・昭和52年12月1日)には，「この小隊の隊長格であつた栗原信の従軍記『六人の報道小隊』を見ると，『我々は輸送船のなかで里村・堺両人と話しあつて最前線に出る決意をきめた』と書いてゐる。この雄猛(ママ)果敢な計画を私が知つたのは，コーランポーの町に着いたときであつた。／(このときのことを，私は『ゲマスからクル

ーアンへ』といふ従軍記のなかに次のやうに書いて，同盟通信の特派員を介しクルーアンから『文芸春秋』へ送つた。」とあり「ゲマスからクルーアンンへ」の内容が抄録してあるが（筑摩書房増補版全集，初出誌と比較すると，わずかな字句の異同がある），他方，初出誌『文芸春秋』には「次の記録は私が馬来から日本の雑誌社に送るつもりで書いた原稿である。しかしこの原稿には何の記録的価値もないと思つたので雑誌社へ送るのを止し，リユクサツクの底にしまひ込んだままにしておいた。事実，戦争記録として価値あるものとは思はれない。ところが今や吾が家へ無事に帰つて来てみると，この原稿でも誰かに読んでもらひたい気持になつて来る。これは何の故か確たる理由はわからないが，たぶん異境においてどさくさの際に書いたといふ点にその一部の理由があるやうにも考へる。」という前書的な一節（全集では削除）があり，「徴用中のこと」中の記述とは矛盾している。井伏の記憶違いか。あるいは同題の別文が存するか。『井伏鱒二全集』第10巻（筑摩書房・昭和40年２月25日）に初収録。

十七年七月下旬ころ＝六号雑記＝　⑩

文学界　　＜再刊＞10巻１号　　１月１日　　p. 104～105

前書の「昭南は今やもはや私にとつては思ひ出の街となつた。しかし昭南それ自体は，ますますめざましい発展に向つて進みつづけてゐることだらう。それを希望するこころ切なるものがある。」が筑摩書房増補版全集では削除されている。『井伏鱒二全集』第10巻（筑摩書房・昭和40年２月25日）に初収録の際に「十七年七月下旬頃」と改題。

昭南タイムス発刊の頃＝南方文化戦士として＝　⑩

サンデー毎日　　22年２号　１月17日号　　１月17日　　p. 12～15

目次の標題は「南方文化戦士として」である。『井伏鱒二全集』第10巻（筑摩書房・昭和40年２月25日）に初収録の際に「昭南タイムズ発刊の頃」と改題。この年，『サンデー毎日』に連載された「南方文化戦士として」のシリーズ中には，火野葦平「比島捕虜とともに」（６号・２月14日），上田広「陣中新聞『南十字星』編集の記」（７号・２月21日），富沢有為男「私の放送陣営」（８号・２月28日），柴田賢次郎「図書出版検閲指導課長の記」（10号・３月14日），神保光太郎「昭南学園校長の記」（11号・３月21日）などが確認できる。

２月

旅館・兵舎＝南方随筆＝　⑩

時局情報　　７年２号　　２月10日　　p. 88～89

『井伏鱒二全集』第10巻（筑摩書房・昭和40年２月25日）に初収録。

３月

新生マライを語る―帰還報道班員座談会―　＊座談会

知性　　６巻３号　　３月１日　　p. 42～62

出席者，中島健蔵・堺誠一郎・井伏鱒二・佐山忠雄・神保光太郎。編集「後記」に「旧臘南方より帰還された多くの報道班員のうち，特にマライ方面に活躍された五氏にお集り願つて，新生マライの文化事情を語つて頂いた。地域を同じうし，しかも一人一人職域の違つた人の集りであるところに，この座談会の面白さ，他に見られぬ充実感があると思ふ。」とある。＊次のような小見出が付けられている。「近代戦の様相」「新聞建設と日本語の進出」「日本語を通して日本精神を」「マライの文学」「華僑の

問題」「スポーツと音楽」「日本紹介の映画を」「新指導者の資格」。実際に現地を体験した者が，その体験・見聞・感想を語るというにとどまり，小見出からうかがわれるような積極的な発言は見られない。

或る少女の戦争日記（一）　⑩

新女苑　　7巻3号　　3月1日　　p. 81～85

末尾に「（つづく）」とある。4月に続載。『井伏鱒二全集』第10巻（筑摩書房・昭和40年2月25日）に初収録の際に「或る少女の戦時日記」と改題。前書的な一節には，昭南タイムス社のレンベルガンという現地人記者に頼んで，かれの姪（オランダ系のユーラシアン）が書いた日記を手に入れ，それを「わたし」が翻訳したものとある。昭和16年「十二月八日」から昭和17年「一月二日」までの「日記」。なお，「徴用中のこと」第25回（『海』11巻9号・昭和54年9月1日）には，この「日記」について，「私が資料部用の資料として集めてゐたシンガポール現地人の戦事（ママ）日記のうち」云々とあって，必ずしも井伏の作家的興味のみによって入手されたものではないようである。次項参照。

待避所

文学界　　＜再刊＞10巻3号　　3月1日　　p. 58～69

6月に続載。「一月三日」から「一月二十三日」までの「日記」。＊冒頭に「――左記の本文は，空襲下のシンガポールに住んでゐた或る混血少女の書いた日記である。仮りに待避所と題をつけ，昨年の一月三日から一月二十三日までの部分を訳出する。日本軍の空襲が次第に激しくなつて行き，しかしマレーの英空軍がまだ抵抗の気勢を見せてゐた頃の記録である。」とあるように，続載の「待避所（二）」（「一月二十四日」～「二月六日」）とともに，「或る少女の戦争日記」（『新女苑』7巻3号～4号）と補いあうものである。「或る少女の戦争日記」の部分が，開戦直後（「十二月八日」～「一月二日」）とシンガポール攻防戦終了直前（「二月七日」～「二月十五日」）の時期に当たっているのに対し，その中間部分に当たる「待避所」は，シンガポール空襲直下の頃であるためか，住民たちの混乱や狼狽ぶりが，一層克明に綴られている。しかし現時点から批判的に見れば，現地住民と，植民地支配者としてのイギリス・イギリス人との離間ぶりが描かれる一方で，空襲の加害者である日本軍に対する怨嗟を思わせるものは皆無であり，また，被害の詳しい表現もない。そして，日本軍の行為を正当化するような，「しかし日本軍は警報が鳴るまでは爆弾を落さなかつた。たぶん民衆を避難所に立ちのかせた後，軍事施設を襲撃するのだらうといふ人もあつた。それが事実なら親切である。」といった個所がいくつかある（ただし，微妙な言い回しには，注意しなければならないであろう。すなわち，たとえば，ここでは，日本軍の「親切」は，語り手以外の他人の判断が先立ち，それを認めればという仮定の上に成立しているのである）。結局，このように，加害者としての存在を視野の外に置いたとき，事態は自然災害とほぼ等しい次元で捉えられることになる。この点に本作品の基調がある，といってよいだろう。いわば，空襲という「災害」を日常生活者の低い視線から云々する，という態度が生じているわけである。（しかし，自然災害と同一次元で見たとすれば，被害の状況が描かれていないのは不自然である。それは，おそらく，戦争の残酷さを描かせない検閲への顧慮が働いていたものと推測される。）これは井伏の限界とも考えられるのだが，しかし，検閲を配慮しなければならなかったところに最大の問題があろう。その点から見たとき

留意すべきは,「日記」を日本人に見せることを避けようとする現地住民の態度が,前書めいたところに記してあることであろう。このような記述がある以上は,当然,この「日記」も日本人向けに仕立てられている,と明言してあると解釈してよい(この「日記」に強烈な毒がないかに見えるのは,実は,そういうところに原因があるのであり,現地住民の本音はまた別のところにある,と井伏はここで断わっていると解釈できるのである)。事実,何人かの知り合いに「日記」の借り出しを体よく断わられた後,ようやく手に入れたこの「日記」の主人公は,「或る少女の戦争日記(一)」に「彼女の説明によると祖国といふものを持たないユーラシアンは,そのときそのときの支配者に従ふよりほかに行く道はない。英国に行けば東洋人だと云つて排斥され,東洋にゐると混血児だと云つてあまり歓迎されさうもない。祖国を持つ人をつくづく羨むと彼女は云つてゐた。」とあるように,必ずしも,親英抗日的な立場にはいないのである。むしろ,そういう少女の「日記」だから入手できたのであるし,このようなかたちで取り上げることができたのである。そうであるにもかかわらず,この「日記」に描かれているのは,戦争のスローガンなどとは無縁に,戦争に怯え,うろたえる人々であった。このように考えれば,単純に井伏の限界を指摘することではなく,検閲を掻潜って,被害者の側に視点を据えようとした井伏の姿勢を評価することが必要なように思われる。前項参照。

【マライの土(作家部隊随筆集)】

井伏鱒二・海音寺潮五郎編<背文字には「マライ軍宣伝班員現地編輯」とある>
新紀元社　3月5日　5000部　B6判　<献辞>1p.　序<目次には「序文」とある>2p.　目次2p.　本文302p.　スケッチ<解説を付す>6葉　定価2円
装丁・塚本圀太郎　スケッチ・栗原信

<目次>

<献辞>	<無署名>	前付p. 1
序	馬来派遣軍宣伝班長/陸軍中佐 大久保弘一	前付p. 2～ 3
目次		前付p. 4～ 5
昭南日記	井伏　鱒二	p.　1～ 36
南征雑稿	小栗虫太郎	p.　37～ 62
コーランポーの記	海音寺潮五郎	p.　63～ 93
敗残の敵	中村　地平	p.　95～111
マライ喰物漫考	小出　英男	p. 113～139
ペナンの郷愁	寺崎　浩	p. 141～159
歴史的会見を見たり	里村　欣三	p. 161～180
友への便り	堺　誠一郎	p. 181～200
パレンパン散見記	北町　一郎	p. 201～220
校長先生	神保光太郎	p. 221～255
不行儀な街――些しは悪口も言はう――	釈　十三郎	p. 257～280
我ら戦へり	佐山　忠雄	p. 281～296
表紙について	塚本圀太郎	p. 297～301

「序」の前半部分を次に引用する。「作家の従軍といふことは,作家自身にも,世間にも,もはや事新らしい現象ではない。然るに大東亜戦争に於ては,作家が所謂従

軍作家としてではなく，徴用令による徴員として，一年以上の長期に亘り直接，軍の編成内に在つたのである。／この事は，作家にとつても，軍隊にとつても最初の経験であつたことは勿論である。その成果に就いては，各作家本来の立場に於て夫々今日迄に発表され，又今後も発表されるであらうが，今回随筆集『馬来の土』として上梓される本書は，是等作家各人が，各自の呼吸と顔貌とを，さりげなく見せ合つてゐるものとして，甚だ特異のものであると思はれる。是等作家と直属関係にあつた予にとつては特にその感が深い。」この「序」に「甚だ特異のものであると思はれる」とあるように，ここに集められたものの多くは，戦意昂揚のためという性格よりも，かれら徴用作家自身の生活ぶりや，また，かれらが異文化と出会うことによって得た驚きや見聞が記された，という性格が強い。そこには，編者である，井伏鱒二・海音寺潮五郎の意図が働いていた推定してよいと思われる。

4月

或る少女の戦争日記（二）

新女苑　7巻4号　4月1日　p.65～69

末尾に「(をはり)」とある。＊「二月七日」から「二月十五日」までの「日記」。

5月

紺色の反物＝小説＝

改造　25巻5号　5月1日　p.114～127

末尾に「(完)」とある。『御神火』（甲鳥書林・昭和19年3月30日）に初収録。

＊昭南市に立寄った画家たちに揮毫して貰って，徴用員たちの帰還土産の手拭を作ることになった。ところが，染色を依頼した先のエイホウ老人は，不始末を仕出かし，それを糊塗するために手拭となるべき反物を紺一色に染上げてしまう。以前，使用人のタムリンが私の御守りを誤って洗濯してしまったとき，その染め直しをしたのもこのエイホウ老人であった。エイホウ老人は，「戦争このかた次第に染物の注文がなくなつたので，その間に指の爪が次第に根元の方から白くなつて来た」と嘆く。染色屋としては不器用で，その生き方においても器用でない老人の，戦争に巻き込まれ一層思わしくなくなった姿を描いた作品である。

6月

借衣＝読切傑作小説集・現代小説＝

オール読物　13巻6号　6月1日　p.30～36

挿絵は小川真吉。『御神火』(甲鳥書林・昭和19年3月30日)に初収録。＊入院中の徴用員仲間・岩崎栄を見舞いに，私は，ジョホール・バルに出かける。病院へ行く前に水浴びをしたところ，私は，脱いでいた衣服を盗まれてしまう。近辺のマレー人一族の「オヤブン」に交渉するが，盗まれた服は戻ってこず，結局，その「オヤブン」から借りた，派手な女物のサロンとシャツを着てシンガポールに帰ることになる。まだその余韻は残っているが，ようやく，戦場が遠のいた後の，のんびりとした気分を点綴した作品と言ってよいだろう。

待避所（二）

文学界　＜再刊＞10巻6号　6月1日　p.38～44

「一月二十四日」から「二月六日」までの「日記」。

来週からの連載物語？

週刊少国民？　2巻23号（通巻55号）？

6月6日号？　　6月6日？

「御神火」最終回（2巻31号<通巻63号>・昭和18年8月1日）の末尾に「来週からの連載物語」として，石川達三の「大いなる朝」の予告記事があり，「(作者から)」とされた石川の文章が載せられていてる。これと同様の措置が取られていれば，当然，本号に「御神火」の予告記事があると推定されるが，現物未調査。

御神火（1）＝連載物語＝　③[6.7.10.12.14.18.19.20.26.29.31]

週刊少国民　　2巻24号（通巻56号）

6月13日号　　6月13日　　p.10～11

挿絵は池部釣。末尾に「次号へつづく」とある。8月1日まで連載。井伏自身が「朝日新聞の子供の雑誌『週刊少国民』に，連載したのだが」(伴俊彦「井伏さんから聞いたこと」その四，『井伏鱒二全集第10巻月報6』・昭和40年2月）と述べているにもかかわらず，掲載誌を『こども朝日』(正確には『コドモアサヒ』であろう)，『朝日少国民』等とするものや，それに加えて御丁寧に掲載雑誌の改題にまで触れる年表類が多いのは不可解である。『親子かうもり』(『週刊少国民』1巻7号《通巻7号》・昭和17年6月28日）掲載時を含め同時期に正式誌名を『こども朝日』，『朝日少国民』とする雑誌は『出版年鑑』，『文芸年鑑』には見当たらない。因みに，『出版年鑑』等によれば，『コドモアサヒ』は昭和16年12月号にて廃刊，『週刊少国民』は昭和17年5月創刊（毎週土曜日発行）とあり，事実，創刊号（1巻1号）の現物には昭和17年5月17日発行と記されている。『御神火』（甲鳥書林・昭和19年3月30日）に初収録。

御神火（2）＝連載物語＝

週刊少国民　　2巻25号（通巻57号）

6月20日号　　6月20日　　p. 6～7

末尾に「(次号へ続く)」とある。

御神火（3）＝連載物語＝

2巻26号（通巻58号）

週刊少国民　　6月27日号　　6月27日　　p.10～11

末尾に「(次号へ続く)」とある。

7月

御神火（4）＝連載物語＝

週刊少国民　　2巻27号（通巻59号）

7月4日号　　7月4日　　p.14～15

末尾に「(次号へ続く)」とある。

御神火（5）＝連載物語＝

週刊少国民　　2巻28号（通巻60号）

7月11日号　　7月11日　　p.14～15

末尾に「(次号へ続く)」とある。

御神火（6）＝連載物語＝

週刊少国民　　2巻29号（通巻61号）

7月18日号　　7月18日　　p.16～17

末尾に「(次号へ続く)」とある。

御神火（7）＝連載物語＝

週刊少国民　　2巻30号（通巻62号）

7月25日号　7月25日　p. 10～11

末尾に「(次号へ続く)」ある。

8月

御神火（8）＝連載物語＝

週刊少国民　2巻31号（通巻63号）

8月1日号　8月1日　p. 14～15

末尾に「(をはり)」とある。

9月

直木賞銓衡感想

文芸春秋　21巻9号　9月1日　p. 86～87

目次には,「第十七回芥川・直木賞発表　日本文学振興会」とのみある。＊「候補作品十五篇のうち，辻勝三郎氏の『雪よりも白く』及び立川賢氏の『幻の翼』を私は佳作として選んだ。いづれも作者自身の身をもつて生み出した素材を取扱つてゐて，その素材にはづみを持たしてゐるところを頼もしく思つたわけである。しかしかういふ鑑賞のしかたは一方的であるかもしれないと思つてゐた。果して山本周五郎氏の『名婦伝』を推す気受けが圧倒的であつた。これも練達の技によつて書かれた作品である。厳然たる婦道を鼓吹する意欲が現はれてゐる。健全な作品である。無論，現代必要な作品である。私もこれを推す気受けに反対すべき理由はない。」以上全文。この第17回（昭和18年上半期）の直木賞は，上記のように山本周五郎に決定されたが，山本はこれを辞退している。なお，井伏は，この回から直木賞の銓衡委員になっている。

猿

『十年』　二見書房　9月15日　p. 3～14

＊月見岡公園に飼われていた猿は，寄贈者・宇多長五郎の死や戦時のことも重なって，山に放たれることになる。が,「親分格の猿」だけが，檻から出ようとはせず，人々を手古摺らせる。生前の宇多長五郎に信頼され，今は町議会の最古参である松尾五平老人は，せめて，その残った一匹だけでも飼い続けようとする。しかし，一月もたたないうちに「鉄類回収運動が起つて，猿の檻を献納することになつた」。五平老人の危惧ほどのこともなく，猿は老人の誘いで檻から山の麓に逃げ,「呆気ない顚末」を迎える。公園の猿の処分という一つの事件を通して，田舎町における事の進め方や，人々のそれぞれの思惑，金属回収運動などが風俗として描かれる。そこには，おのずと，そういった人間の都合や思惑によつて左右される存在としての猿が定位されるのだが,猿に対する読者の思い入れを峻拒するような「呆気ない顚末」の設定は，感傷を避けたがる点でいかにも井伏らしく思われる。なお，空襲下のシンガポールで，動物園から猿が解放されたということを井伏は耳にしている(「徴用中のこと」第25回,『海』11巻9号・昭和54年9月1日)ので，これが一つのモチーフであったと考えられる。因みに，テレビ東京編『証言　私の昭和史』4太平洋戦争後期（旺文社文庫・昭和59年12月20日）によれば，空襲を恐れて動物園の猛獣を殺した記事が新聞に出たのは，この9月のことであり(『朝日新聞』9月3日),上野動物園では，8月17日がその処分の最初の日だったという。また，この動物処分を命じたのは，前シンガポール特別市長で当時の東京都長官大達茂雄だったとのことである。

【十年】

早稲田文学社（代表者・谷崎精二）編　　二見書房　　9月15日　　3000部
B 6判　　目次 3p.　本文310p.　跋＜目次では「あとがき」＞3p.　　定価 2 円50銭
特別行為税相当額 8 銭　合計 2 円58銭　　装丁・大淵武夫　　題簽・会津八一

＜目次＞

目次		前付p. 1～　3
猿	井伏　鱒二	p.　3～ 14
風塵子	中山　義秀	p. 15～ 34
北京にて	浅見　　淵	p. 35～ 52
信仰	尾崎　一雄	p. 53～ 73
昭和九年百姓日記	逸見　　広	p. 75～118
台湾日記	丹羽　文雄	p. 119～136
手品師	火野　葦平	p. 137～153
泥と赤土	田畑修一郎	p. 155～177
蛙	井上友一郎	p. 179～209
金婚式	長見　義三	p. 211～246
四月三十日夜	宮内　寒弥	p. 247～269
松の花	野村　尚吾	p. 271～310
跋	谷崎　精二	p. 311～313

「跋」(谷崎精二）冒頭に，本書の由来が次のように記されている。「『早稲田文学』創刊十周年紀念として母校文学部出身で現文壇に華々しく活躍して居られる十二名の作家からそれぞれ書き下し短篇を寄与され，創作集『十年』が二見書房から出版される事になつた。」

10月

吹越の城＝読切傑作小説集＝　③[4 . 7 . 9 .12.15]

文芸読物　　13巻10号　　10月 1 日　　p. 42～54

挿絵は田代光。『御神火』(甲鳥書林・昭和19年 3 月30日）に初収録。

桃葉先生之碑

博浪沙　　8 巻 8 号　　10月 5 日　　1 面

『博浪沙』は 7 巻 5 号（昭和17年 6 月 5 日）からタブロイド版に体裁が改められている。＊「みなさんのおかげで田中先生の碑が出来た。」以下，桃葉田中貢太郎の記念碑が高知県桂浜に建立されたことや，その碑の様子を記し，「とりあへず報告し，みなさんに感謝します。」という一文で終わる。末尾に「(一八・七)」と日付が付されている。

11月

鐘供養の日？　③[7 . 9 .12.14.17.20.27.30]

陣中読物？　　1 号？　　11月？　　p. ？

11月頃とするのは，筑摩書房『増補版・井伏鱒二全集』第 3 巻の米田清一「解題」により，『陣中読物』第 1 号とするのは，伴俊彦「井伏さんから聞いたこと」その四（『井伏鱒二全集第10巻月報 6 』・昭和40年 2 月）による。『御神火』(甲鳥書林・昭和19年 3 月30日）に初収録。

12月

布山六風＝創作＝　［2］

文学界　　＜再刊＞10巻12号　　12月1日　　p. 49～59

『御神火』（甲鳥書林・昭和19年3月30日）に初収録。＊私は，再婚を勧めに奥多摩檜原村に隠棲している布山六風を訪ねる。画家であった六風は，師匠の秘密を見てしまったため破門され，現在，百姓の傍ら養魚池を経営している。六風は世間から遠ざかり，私の役割に対しても取り合う隙を見せず，養殖の仕事に全く余念がないようである。野球用語からの外来語の排斥，学徒出陣，といった戦時体制が一層濃くなる一方で，“時局をわきまえない”「細雪」が連載の中止を強要されたのもこの年のことであった。時局と無縁というより，そういう時代に背を向けた布山六風に主人公が設定されているところに，井伏の一つの姿勢がうかがわれよう。

＜無題＞＝一，本年は綜合雑誌，文芸雑誌を通じて近年にない多くの新人の小説が掲載されたが，それらの作品について。／二，この一年間に雑誌，新聞に発表された従軍記，報道文について。／三，本年最も感銘を受けた文学作品。――到着順――葉書回答＝　＊アンケート回答

文芸　　＜改造社版＞11巻12号　　12月1日　　p. 58～64　井伏分p. 61

目次では，「本年度の新人について／従軍記・報道文について／本年度最も感銘を受けた文学作品」とある。＊「新人の小説では文芸思潮十一月号の『伝染病院』（柳町健郎）を感銘ふかく読みました。」以上全文。井伏は『伝染病院』の掲載誌を『文芸思潮』としているが，正しくは，『文芸主潮』2巻11号（昭和18年11月1日，p. 2～35掲載）である。「伝染病院」は伝染病院の不手際で幼いわが子を失った事件を，父親の視点から描いた作品である。井伏が『文学報国』のアンケートの回答（次項）に述べているように，およそ，「時局」とは無縁の作品である。唯一，戦時を感じさせるのは，「この，十二月八日の開戦以来，ハワイやマレー沖の大戦果，香港，比律賓，それからマライ半島に潮のやうに寄せて行く眼覚ましい皇軍の大攻略戦など，毎日，新聞やラヂオをむさぼるやうにしてゐたのに，子供の発病以来，祖国の攻防と運命とを賭したこの大戦の歴史的な時間を，ともすると忘れがちになつてゐる昨今が急に振り返られて，戦争の切実さと，子供の病気の苦痛さが一つになつて，体の中で暴れ廻つてゐるやうな気持だつた。」という一節だけである。なお，同回答中，井伏の作品に言及したものには，「従軍記は余りよんでゐませんが井伏鱒二の『花の街』，豊田三郎の『行軍』など愛読しました。」（中村武羅夫），「題を忘れたが，井伏鱒二氏の随筆に感心しました。」（橋本英吉）という二つがある。次項参照。

＜無題＞＝推薦したい新人の作品＝　＊アンケート回答

文学報国　　11号　　12月1日　　2面

＊「単行本ではあまり読まなかつたのでよく知りませんが，雑誌（同人雑誌）のなかでは文芸思潮十一月号の『伝染病院』（柳町健郎作）といふのを感銘深く読みました。約百枚ばかりの小説ですが実直な家族一同の姿がよく現はれ，感情を抑制しながら書いてあると見えながら感動的な文章に見えました。地味で本格的なところに感心させられました。しかし時局的な作品ではなく，また戦時下に急用とは思はれる作品でもなかつたやうな気もします。」以上全文。前項参照。

序　★

『花の町』　　文芸春秋社　　12月15日　　p. 2～8

南航大概記　⑩

『花の町』　文芸春秋社　12月15日　p. 173～253

【花の町】

文芸春秋社　12月15日　10000部　B 6判　目次1p.　序7p.　本文245p.

定価２円　特別行為税相当額８銭　頒価２円８銭　装丁・野間仁根

＜収録作品＞

花の町　p. 9～171　南航大概記　p. 173～253

なお，東京神田・田村書店の御教示，『文芸春秋三十五年史稿』(文芸春秋新社・昭和34年４月８日）の「出版総目録」によれば，発行日付を異にする満州文芸春秋社版があるとのことである。

§昭和19年(1944)

3月

便乗紀行＝読切傑作小説集＝

文芸読物　14巻３号　３月１日　p. 46～58

本文には井伏鱒二の肩書が「前陸軍報道班員」とある。末尾に「(をはり)」とある。挿絵は田代光。「徴用中のこと」第６回（『海』10巻２号・昭和53年２月１日）には，「その日＜昭和17年２月１日――編者注＞の野菜徴発のことを，私は『クルーアンにて』という題の雑文に書いて，同盟通信特派員の前田雄二記者に渡し，前田記者がそれを検閲の尾高少佐に出した。」とあり，野菜徴発の様子が記されているが，それは，この「便乗紀行」中のエピソードのいくつかと重なる。徴発隊の隊長の姓が両文の間で相違する（「徴用中のこと」では「和田伍長」，「便乗紀行」では「梅江曹長」となっている）うえ，時期的にもずれるので別文が存するとも考えられる。あるいは，「徴用中のこと」にいう「クルーアンにて」は，発表されずに，執筆されただけにとどまるか。＊クルーアンに宿営中（本文中には１月29日の夕方から２月14日の朝までの２週間となっているが，「南航大概記」，「徴用中のこと」第６回によれば，井伏自身は，１月29日から２月11日までクルーアンに宿営し，２月12日にジョホール・バルに着いている。これも，一種の創作と考えられなくもない。あるいは，本文は誤植か），私は，「何か無性に見たくてたまらない好奇心」から野菜徴発のトラックに便乗して，敵の陣地を見に行く。その体験から得た見聞――日本兵が辛子菜を注意深く採ること，敵陣近くに放置され死臭を放っていた豚の死骸のこと，敵の陣地内に落ちていた手紙のこと，それらを巡る兵隊たちの会話，隊長が兵隊たちに与えた注意のこと，トラックが牛に傷を負わせた一件のこと，野菜畑の主らしい奇妙な老人のこと，など――が点綴された作品である。トラックに牛を傷つけられたマレー人や，野菜畑の老人をもっと描き込めば，この作品は，もう少し違ったものになったであろうと思われるが，たとえば，作品末尾においては，この老人のことを「これは私の根拠のない想像であるが，この老人はこの家の人間ではないのかもわからない。何だかそんなやうな気持がした。」と思わせぶりに述べるだけで終わっている。井伏らしく，見聞のスケッチに重点が置かれているが，現地住民に対する日本兵たちの細心で丁寧な姿勢が強く印象付けられる。その意味では，宣撫班小説の枠組のなかにとどまっている，といってよいだろう。

直木賞選評

文芸春秋　22巻3号　3月1日　p. 64

目次には「芥川・直木賞銓衡経緯　日本文学振興会」とある。＊「『山畠』『蛾と笹舟』二篇とも即興的に執筆したのではないだらうかと考へたが，おそらくこの作者はかういふ姿の作品を書き慣れてゐるのだらうと私はまた考へなほした。しかし姿のことなど今は問題ではない。二つとも穏健平明で，決して姑息なるところがない感じである。敢て大きく見せようとする加工の跡がなくて清潔であると思つた。それで私はこの作品に一票を投じた。」以上全文。なお，この回（第18回，昭和18年下半期）の直木賞は，「山畠」「蛾と笹舟」により森荘已池が受賞している。

【御神火】

甲鳥書林　3月30日　5000部　B 6判　目次1p.　本文218p.　定価2円　特別行為税相当額22銭　合計売価2円22銭　装丁・奥村林暁

＜収録作品＞

御神火	p. 1～ 74	布山六風	p. 145～169
紺色の反物	p. 75～108	隠岐別府村の守吉	p. 171～184
借衣	p. 109～127	吹越の城	p. 185～218
鐘供養の日	p. 129～143		

永田龍太郎編『井伏鱒二文学書誌』（永田書房・昭和47年8月20日）に「定価2円20銭」とするのは誤りである。

4月

捕虜の印度兵

『新生南方記』　北光書房　4月20日　p. 158～163

日本文学報国会名義の「凡例」に，「これらの短文は昨年四月以来約半歳に亘つて『新南方読本』の題下に対米放送に翻訳使用されたものである。日本放送協会国際部の企画に基き本会南方文化研究委員会の陸海軍報道班作家がそれぞれ執筆したものであるが，各作家の現地に於る日常的見聞を語りつつその間おのづから我が南方建設の着々たる進捗状況と原住民の協力ぶりを感知せしめ，敵国民をして秘かに我が実力を畏怖するの念を懐かしめることを主眼としている。」と記されているので，本書が初出と推定される。＊戦闘が終わったばかりのイポー市で，私は，トラックに載せられた捕虜のインド兵を多数目にする。引率していた上等兵は，捕虜が逃亡する心配もなく，かえって，その数が知らない間に増えていると言う。先程，なに食わぬ顔で，捕虜の群れに加わったばかりのインド兵に，私が戦闘の状況を尋ねてみると，「前方からは日本兵が撃つて来る。逃げようとすると後方から英国兵が撃つて来る。日本兵の機関銃と，英国兵の機関銃と，ここの二つに挾まれた。だから，自分たちはサンドイッチ隊だと云つた戦友がゐた。そいつは戦死した。」と答える。そして，この作品の最後は，そのインド兵の述懐に対する，私の次のような感想によって結ばれている。――「その様な英国はいつかは必ず人道の神の裁きがある。」自分から進んで捕虜になる，インド兵の奇妙な行為に興味を覚えたところに井伏のモチーフはあるようだ。事実，インド兵に対するイギリスの待遇には問題はあったようで，日本軍の働きかけによつて多くのインド兵が積極的に投降し，やがてインド国民軍が創設される。しかし，「大東亜共栄圏」構想に基づく「成果」を素朴に喜んだりするよりも幾分かはましだが，インド兵を利用しようとしていた日本軍の構

想に沿うものであることも，間違いない。『新生南方記』中の窪川稲子「旅の日記」が，マレーの結婚式の様子を記し，それ以外の事柄に一切触れていないのと比べれば，ここに記されている事柄が井伏の目撃した事実であり，この時期に周到な情勢判断を要求するのは苛酷だとしても，自己の思考を放棄した，取って付けたような最後の一文には，やはり，些かの疑問を抱かないではない。あるいは，このような最後の一文が記されてはいるものの，その，これまでの行文とは場違いなところにこそ井伏の狙いはあった，というべきなのであろうか。

【新生南方記】

日本文学報国会（代表者・中村武羅夫）編　　北光書房　　4月20日　　承認部数5000部　　B 6判　　序2p.　凡例2p.　目次8p　本文337p.　　売価3円50銭

＜定価3円20銭　特別行為税相当額30銭＞

＜目次＞

序　　日本放送協会会長　下村　海南　前付p. 1～2
凡例　　日本文学報国会　前付p. 3～4
　　p. 1～8
目次
〔ビルマ〕
ラングーンの興奮　　小田　嶽夫　p. 12～ 15
東洋の魂　　豊田　三郎　p. 16～ 21
兵士になつたビルマの僧侶　　倉島竹二郎　p. 22～ 26
ビルマの英兵について　　榊山　　潤　p. 27～ 32
英軍列車顚覆す　　北林　透馬　p. 33～ 38
美しい協力　　小田　嶽夫　p. 39～ 42
新生ビルマの諸相　　倉島竹二郎　p. 43～ 47
新生蘭貢案内　　豊田　三郎　p. 48～ 53
トンゼーにて　　北林　透馬　p. 54～ 58
頼母しきビルマ防衛軍　　倉島竹二郎　p. 59～ 63
新らしきビルマの女性　　倉島竹二郎　p. 64～ 69
釈迦祭　　豊田　三郎　p. 70～ 74
燃え上る日本語熱　　倉島竹二郎　p. 75～ 79
日本語学校学芸会　　小田　嶽夫　p. 80～ 83
私とコック　　水木　洋子　p. 84～ 90
愉しきビルマの旅　　豊田　三郎　p. 91～ 96
〔ジヤワ〕
ジヤワの話　　北原　武夫　p. 98～103
スラバヤ沖海戦と俘虜　　大江　賢次　p. 104～109
ジヤワの子供たち　　大江　賢次　p. 110～115
原住民の協力　　大江　賢次　p. 116～120
カツクマンの話　　美川　きよ　p. 121～126
BUDDHA'S IN THE TROPICS　　TOMOJI ABE　p. 127～131
〔バリー〕

バリの住民たち	小坂　英一	p. 134～139
バリーだより	大江　賢次	p. 140～145
BALI TODAY	TOMOJI ABE	p. 146～149
バリー島にて	美川　きよ	p. 150～156
〔マライ・昭南〕		
捕虜の印度兵	井伏　鱒二	p. 158～163
昭南の捕虜	大林　清	p. 164～170
印度人に就て	大林　清	p. 171～176
昭南交響楽団――音楽文化の培ひ――	神保光太郎	p. 177～182
聖堂のをばさん――宗教について――	神保光太郎	p. 183～190
私と現地人	寺崎　浩	p. 191～196
シンガポールの避難民	里村　欣三	p. 197～202
空爆の路上にて	水木　洋子	p. 203～208
南方の子供達	美川　きよ	p. 209～213
三人のマライ青年	大林　清	p. 214～220
日本語は花びらのやうに	神保光太郎	p. 221～225
小さなレモン	月原橙一郎	p. 226～234
白いハンカチ	月原橙一郎	p. 235～238
昭南造船所の復興	小坂　英一	p. 239～246
旅の日記	窪川　稲子	p. 247～254
〔比島〕		
東へ帰る	柴田賢次郎	p. 256～259
更生する比島軍	柴田賢次郎	p. 260～265
ネグロスの綿畠にて	阿部　艶子	p. 266～271
貨物船にて	阿部　艶子	p. 272～278
名乗らぬ青年	上田　広	p. 279～284
マニラ湾を眺めて	阿部　艶子	p. 285～289
若い俘虜	上田　広	p. 290～295
〔セレベス〕		
マカツサルの魚市場	小坂　英一	p. 298～302
メナドの民心	小坂　英一	p. 303～307
マカツサルの子供たち	小坂　英一	p. 308～312
〔ボルネオ〕		
サンダカンと「風下の国」の作者	里村　欣三	p. 314～318
ダイヤ族の生態	清水　登之	p. 319～321
〔仏印〕		
日本の衣裳	月原橙一郎	p. 324～329
〔スマトラ〕		
松の翠	月原橙一郎	p. 332～337
〔チモール〕		
チモールの王様	足立　知雄	p. 340～345

刊行の意図や成立事情を記した「凡例」の全文を以下に引用しておく。「これらの短

文は昨年四月以来約半歳に亘つて『新南方読本』の題下に対米放送に翻訳使用されたものである。日本放送協会国際部の企画に基き本会南方文化研究委員会の陸海軍報道班作家がそれぞれ執筆したものであるが，各作家の現地に於る日常的見聞を語りつつその間おのづから我が南方建設の着々たる進捗状況と原住民の協力ぶりを感知せしめ，敵国民をして秘かに我が実力を畏怖するの念を懐かしめることを主眼としてゐる。南方建設の実状はもとより，戦時下我が対敵宣伝放送の実相は国民すべてのひとしく知らんと欲するところであらう。ここにその一部を輯録し，特に放送協会下村会長の序文を請うて国内に公にする所以である。」

倍増産も義足から―傷痍の身で表彰の島根県沢谷村藤原武夫君―

週刊毎日　　23年16号　　4月23日　　p. 20～21

目次には副題はない。挿絵は米倉壽仁。リードに「四月二十四日から全国一斉に軍人援護強調週間が展開されるが，それに先だつて遺族，家族，傷痍軍人の中から善行者として選ばれて表彰された人々を文と画によつて紹介すべく文学報国会と美術報国会から作家と画家が派遣された。これはその中の一つである。」とある。＊重なる不運の中にありながら，傷痍軍人の身で，絵に描いたように模範的な農民でもあるという藤原君の身の上話を，私は村長から聞く。「ところが村長の紹介で藤原君に会つて話をしてみると，私の想像はまるで的外れであつたのを認めなくてはならなかつた。」として，村長の「言葉にまた艶消しをかけるやうな趣きで」，自己について語る藤原君のことばを書きとめている。藤原君という人物の謙譲な人柄を取り出すことで，「傷痍の身で表彰の」という如き上調子の宣伝文句を諷していると解するのは，深読みであろうか。「村長」（『文芸春秋』・昭和19年6月1日），「川谷ハル女」（『家の光』・昭和19年6月1日）の項参照。

6月

村長＝随筆＝

文芸春秋　　22巻6号　　6月1日　　p. 3～4

＊私は島根県の塩津浦と沢谷村に模範的軍人家族と傷痍軍人をたずねた。二つの村の村長たちは，いずれも，長年，村の風儀の改善に努め，ようやくのことで立派な村にできたのだと言う。帰途，車中で隣席の青年にこの二人の村長の話をしたところ，あたかも，私がこの二人の村長を比較したように解釈され，その青年からたしなめられる。「倍増産も義足から」（『週刊毎日』・昭和19年4月23日），「川谷ハル女」（『家の光』・昭和19年6月1日）の項参照。

川谷ハル女＝現地報告＝

家の光　　20巻6号　　6月1日　　p. 28～30

挿絵は米倉壽仁。「七浦の漁師原」（筑摩書房『増補版・井伏鱒二全集』第12巻所収）に「もう十何年も前の，敗戦の色濃くなつてゐた当時のこと。／私は二科会のY画伯と一緒に，山陰の七浦といふところへ出かけて行つた。（略）／この旅行の目的は，出征軍人の妻として亀鑑と云はれるべき婦人を訪問し，肖像を描いたり紹介文を書いたりすることであつた。当時，陸軍省と文部省との命令で，日本全国の各県へ画家と文筆業者との一組づつが差向けられ，私の友人たちもそれぞれ出かけて行つた。亀井君は山梨県へ出かけて行き，私は鳥取県を指命されたのであつた。（略）／私は東京に帰つて来てその見聞記を新聞に書いた。」とあるのは，その内容とY画伯（米倉壽仁と推定される）というところから，この時のことと推定される。「倍増産も義

足から」（『週刊毎日』・昭和19年４月23日），「村長」（『文芸春秋』・昭和19年６月１日）も，この旅行に取材したものである。なお，昭和18年５月の項に，山陰七浦訪問の件を置く年譜が多いが，それは，「村長」の「去る二月下旬，私は島根県の塩津浦といふ漁村に出征軍人の家族を訪ね，それから同じ県下のずゐぶん山奥にある沢谷村といふ農村に傷痍軍人を訪問した。いづれも銃後善行者として表彰を受け，時人の模範たるべき軍人家族であり傷痍軍人であるといふことで，私は各個その村の村長さんたちの道案内で訪問したのである。」（「塩津浦」に取材したのがこの「川谷ハル女」であり，「沢谷村」に取材したのが「倍増産も義足から」であろう）という記述から，「昭和19年２月下旬，日本文学報国会から島根県に派遣され，出征軍人家族，傷痍軍人の訪問記を書く」と訂正する必要があろう。＊私は，村長と在郷軍人会分会長の案内で，島根県簸川郡北浜村大字塩津に，出征軍人の模範的な妻である川谷ハルを訪問する。村長から提供された，彼女の家庭状況を「記録した謄写版の書類」には，その模範的な行為が，三個条にわたって記されている。若布採りをしていた当人を訪ね，「私が慰問の言葉を述べても，若布とりの苦労について尋ねても，ハルさんはたゞ伏目になつて頭を下げるだけであつた。したがつて村長さんが傍らから，その代弁に乗り出す必要があつた。」このような次第で，彼女の風貌もほとんど描かれていない。彼女の態度は，謙譲とも迷惑がっているとも判断しかねるが，いずれにしろ，その結果，案内役の村長の姿が目立ち，もっぱら村長による案内の記録という色彩が濃い。出征軍人家族の善行者顕彰などということが，所詮，官製のものでしかないことが明らかにされている，と評してよいだろう。

昭南所見　＊詩　⑩[23.34]

四季　81号　終刊号　6月27日　p. 6～7

「シンガポール所見」と改題して，『厄除け詩集』（木馬社・昭和27年１月10日）に初収録。

7月

防火用水＝短篇小説特輯＝　[7.8.19]

文芸春秋　22巻７号　7月１日　p.20～25

カットは鈴木信太郎。「防火水槽」と改題して，川端康成・武田麟太郎・間宮茂輔編『日本小説代表作全集』13　昭和19年度・20年度（小山書店・昭和21年10月10日）に初収録。＊「最近まで，私のうちには防火用水の容器が五つあつた。」そのうちの一つは，林芙美子から欧州土産の代わりに貰った鉄砲風呂であったが，愚妻は，私の反対にもかかわらず，それを疎開先の甲州にまで，強引に持って行ってしまう。私は，風呂槽がなくなったので防火用水代わりに風呂場に置いた水甕の鯉を眺めてみたり，近所のこどもが，疎開してしまった私の息子を呼ぶ声を耳にしたりする。家族を疎開させてしまった私の味わう，いるべき者のいない，空虚感が見事に表現されている。鉄砲風呂を持って行く行かぬでの夫婦喧嘩が描かれたり，その風呂にまつわる林芙美子のエピソード，さらには，私の幼い時の記憶など，喪失した過去の思い出が点綴されたりするのも，すべてその空疎感につながっている。筑摩書房増補版全集に収録されていないのが惜しまれる佳編である。

鼠ボーイ

少国民の友　21巻４号　７月号　7月１日　p.50～52

本文には井伏鱒二の肩書が「報道班員」とある。挿絵は大石哲路。松本武夫「報道

班員・井伏鱒二の『鼠ボーイ』」(『昭和文学研究』6集・昭和58年2月10日）に内容の紹介がある。＊ゲマスに滞在中,私は,「マライ一の大どろぼうジミイ・ネルソンといふ者のこぶんだといふ」チャーリーと知合いになる。ジミー一家は,「どろぼうをするが，ぬすんだ金や品物はマライの貧乏人にみんなあたへてゐたといふ」,「マライの鼠小僧といつてもいい」ような泥棒である。イギリスに反感を持っていたかれらは，今では,「自分からすすんで日本軍のために力をつく」す，「正しい労働者になつ」ている。チャーリーは私がゲマスを出発する時がくれば，七面鳥を進物にやろうという。しかし，私はチャーリーに何も告げずにゲマスを出発した。私はそのことが心にかかり，七面鳥を見るとチャーリーのことを思い出しはするのだが，結局，ゲマス再訪を果たせないまま帰還した。チャーリーは，不良性と単純な善良性が同居する愛すべき人物として描かれている。が，それにしても，幾分，奇妙な齟齬を感じさせられる作品である。それは，ジミー一家を「正しい労働者」と規定しながら，かれらが「知らない人の家にむだんで住んでゐたわけです。」と記したり，チャーリーが七面鳥を盗んでくるらしく暗示していたりするからである。改心した「どろぼう」の持つ過去の尻尾とも解釈できなくもないが，しかし，それでは,「正しい労働者」などという大上段に構えたことばと，うまく符合しない。些細な個所ではあるが，ここには，児童向けあるいは宣伝向けに美化することへの，井伏の躊躇いがあるように，私には思われる。

11月

九百三十高地＝新長篇童話＝

少国民の友　　21巻8号　11月号　　11月1日　　p.25～32

本文冒頭に「(一)」とある。挿絵は大石哲路。本文末尾に「(つづき)」とある。21巻11号まで続載を確認（ただし，21巻10号は休載)。＊「北支」の山奥にある九百三十高地では，庄野曹長を部隊長とする設営班が陣地を構築している最中である。この設営班には，陳家荘にいたことから陳太郎と名付けられた中国人孤児がいる。兵隊たちから可愛がられる陳太郎ではあるが，自分自身の素性もよくわからないらしい。ある夜，最近頻繁に貯蔵庫の食料がムジナに盗まれるということで，陳太郎はムジナ捕りの仕掛を作り，兵隊たちのあいだでは一しきりムジナとタヌキの区別についての論議に花が咲いた。その時，麓の方で，敵の機関銃の音が聞こえてくる。味方が，九百三十高地の崖下に敵を追い詰めているらしい。設営班も戦闘に加わり，ダイナマイトで敵を追い払うことに成功する。しかし，さかんに戦闘に参加したがっていた陳太郎の姿が見えなくなる。皆が心配していたところ,陳太郎は,八路軍の少年を捕虜として連れ帰って来る。その少年は，一時的に目をやられていたので，治療してやろうとするが，頑なに心を閉ざしている。連載の第三回までしか見られなかったので臆断にすぎないかもしれないが，この作品の要は，山頂に宿営する設営班を舞台として，作品の世界が外界から閉じられているところにある，と思われる。現地住民や他部隊との交渉が全く描かれないですまされれば，大人たちの小集団とかれらに可愛がられている一人の少年という一般的な枠組を嵌められるからである。その結果，兵隊であるとか，かれらに付き従っている中国人孤児であるとかいった，戦場にあることの特殊性・問題性は，遠景に遠ざけられてしまう。こうした設定は，戦地を舞台にした児童向け作品を戦時下に書く際の，苦肉の策とも考えられないではないが，結局は，そうした問題から目を逸らしているように思われる。

（ただし，捕虜の少年が登場するところから，この枠組は破れるのだが，その先の展開は不明である。もっとも，展開の仕方は二通りしかないであろう。「猿」（昭和18年９月）の如く，少年兵の逃亡で，「呆気ない顚末」を迎えるのか，それとも，典型的な宣撫班小説として，少年兵がこの枠組の中に組み込まれてメデタシ，メデタシ，となるかのいずれかであろう。）厳しく評価すれば，児童向けとはいいながら，基本的には，戦争の持つ問題性から目を逸らし，それどころか，逆に，善良な日本兵と中国人少年との交情が全く疑われていない点において，一種の宣撫班小説である，といってよい。かつて，ロフティングを賞賛した井伏の態度と比較したとき，少なくとも，この作品に関しては，井伏の姿勢に疑問を私は差し挟まざるをえない。やはり，それは，井伏が直接経験しなかった大陸での戦争に題材を得たからであろうか。あるいは，児童向けということで，こどもたちを楽しませるために安易に美化してしまったのであろうか。もちろん，以上は連載第三回までのことであって，以降の展開において，作品の相貌が変わっているかもしれないことを付け加えておきたい。

12月

九百三十高地　第２回＝長篇童話＝

少国民の友　21巻９号　12月号　12月１日　p. 38～44

§昭和20年（1945）

２月

九百三十高地

少国民の友　21巻11号　２月号　２月１日　p. 32～37

連載第３回。末尾に「（つゞく）」とある。なお，昭和20年１月１日発行の１月号（21巻10号）には休載。この21巻11号の後，『少国民の友』の現物を確認できたのは昭和20年10月１日発行の22巻７．８合併号であるが，そこには「九百三十高地」は載せられていない。この空白期間中の『少国民の友』刊行状況については，小学館の社史によっても詳細は不明である。

６月

里村君の絵

文芸　＜河出書房版＞２巻５号　５．６月合併号　６月１日　p. 50～59

＊奇妙な熱に冒されていた最中に，私は，里村欣三が戦死したという新聞記事を目にする。徴用で南方に連れて行かれる途中，私の矢立で，素人絵を描いていた里村は，うっかりと筆の穂を海中に落としてしまうということがあった。里村はシンガポールで，律義にも，代わりの筆を買って私に返してくれる。このような徴用中のエピソードをいくつか交えた作品で，体裁はそのようにはなっていないが，一種の追悼文といっていいだろう。

10月

【丹下氏邸】◎

新潮社　10月25日　Ｂ６判　117p.　定価１円60銭

＜収録作品＞

丹下氏邸　　集金旅行

永田龍太郎編『井伏鱒二文学書誌』(永田書房・昭和47年８月20日)には,「丹下氏邸」のみが収録作品とされているが，小切田進編「図書総目録」(『新潮社八十年図書総目録』・新潮社・昭和51年10月20日，第４刷・昭和52年２月20日）の昭和20年10月の項（同書p. 244）には「25日　井伏鱒二『丹下氏邸』(集金旅行，等二編)」とあり，「丹下氏邸」・「集金旅行」の２編が収録されていることになっているので，こちらに従った。

◆補遺（昭和60年10月17日記）

昭和17年６月

序

『釣趣戯書』　三省堂　　６月10日　　前付p. １～８

佐藤垢石著『釣趣戯書』(定価２円80銭，Ｂ６判，5000部，井伏・序8p. 佐藤・自序・1p. 目次6p. 本文525p. 付録10p.）の序文。「このたび垢石が，釣の本を上梓するから，私に序文を書けといふのである。幾度も書いてみたが，面白く書けない。俄か拵への序文などは，おざなりに堕して気に食はぬものだ。そこで私は，いろいろ思案した揚句，曾てある雑誌に発表した垢石のことに関する私の文章を想ひだしたのである。その文章が，釣人としての垢石の人柄を，一番よく語つてゐる。拙味の序文よりも，その方がよほど序文らしいと考へた。以下がそれである。／――一六，一一，一九――」という前書があり，以下，その文章「釣魚記」（『文芸春秋』・18巻12号・昭和15年９月，p. 256～261）のほぼ前半部分（p. 256～258）が引用してある。「俄か拵への序文などは，おざなりに堕して気に食はぬものだ。」と記されているところから判断すれば，おそらく，徴用出発（昭和16年11月21日東京出発）間際であるため，井伏は十分に文章を練る余裕がなかったものと思われる。「解説」(『井伏鱒二集』新日本文学全集第10巻，昭和17年９月１日）の項参照。

◆校正追記（昭和61年１月５日記）

○本年表稿p. 57には，『夏の狐』井伏鱒二随筆全集第１巻（昭和16年３月23日）と，その書名を背表紙の「夏の狐　井伏鱒二随筆全集第一巻」に従って掲げておいたが，奥付には書名が「夏の狐」とのみ記され，扉には「夏の狐／井伏鱒二著／随筆全集第一巻／春陽堂刊」と記されていることを念のため追記しておく。以下，同全集の『山の宿』（昭和16年10月20日，本年表稿p. 61)，『風貌姿勢』（昭和17年２月18日，本年表稿p. 65）も同様。

○『丹下氏邸』（昭和20年10月25日）の収録作品について，岡本隆男氏からも「丹下氏邸」，「集金旅行」の２作品が収録されているとの御教示を得た。

○迂闊にも，既に，永田龍太郎編『井伏鱒二文学書誌』（永田書房・昭和47年８月20日）の「改訂増補版」（昭和60年５月30日）が上梓されていたことを知らずにいた。しかし，同書の「附記」に言うように「書誌的な文学書目ではない」ためか，「改訂増補版」においても，少なくとも本年表稿が依拠もしくは言及した部分は改訂のあとがないので，本年表稿の記述を訂正しなかった。